

# 管理官評価

資料 8

内閣府参事官（青年国際交流担当）

矢作 修己

## プロローグ

平成 26 年度グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」は、平成 27 年 1 月 26 日の陸上研修で幕を開け、2 月 2 日に横浜港を出航してから那覇（沖縄県）と大船渡（岩手県）への寄港を経て（この間、陸前高田に陸路で訪問）2 月 13 日に東京・晴海港に入港するまでの船上研修、その後、日本参加青年のみ 2 月 21 日まで海外研修を行い、2 月 23 日までの帰国後研修了をもって、予定していたすべてのプログラムを無事修了することができました。この間、この事業の円滑な実施に御協力いただいたすべての関係者の皆様方に、この場をお借りして御礼申し上げたいと思います。誠にありがとうございました。

ところで、全プログラムが終わり、改めて振り返ってみると、様々な場面でお会いしてお世話になった方々、更には NL を始めとする各デリゲーションメンバーから、言葉では言い表せないほどのたくさんの贈り物をいただいたことに気付きます。これらの中には、我々の心に深くしまわれている、目に見えない無形の贈り物も多く含まれていることだと思います。

この事業を通じて得られたものすべてについて挙げることは、紙幅の関係で難しいですが、ここでは項目をある程度絞って、初めにプログラム中の活動に関して、特に心に残ったことや気付いたことなどについて、続いて、管理官という個人の眼を通してのことにはなりますが、参加青年たちの学びと成長、友好関係、人的なネットワーク形成などの面から、気付いた点などについて記します。

## コース・ディスカッション

コース・ディスカッションは、この事業の柱となるものです。異文化理解、教育、情報・メディア、社会起業家精神、ボランティア精神という、世界共通の五つの課題について、精力的に議論が行われ、事業期間後半には、それぞれをまとめる形でプレゼンテーションが行われました。

コース・ディスカッションでは、基本的な知識の共有などが図られた後、多くの時間が参加青年同士のディスカッションに充てられ、小さな集団での議論とより大きな集団での議論、様々な事例を活用した議論など、工夫をこらしたやり方によって、活発なディスカッションが行われたようです。

またコースごとのプレゼンテーションは、劇形式のもの、代表者によるプレゼンテーションの後に各々が決意表明するものなど、各コースともに趣向を凝らして多彩な形で行われましたが、いずれも一部の特定の人だけが目立つことはなく、各メンバーの持つ個性や能力が發揮されながらも、全体としてまとまりのあるプレゼンテーションでした。

今回の事業の共通テーマは「青年の社会貢献」でしたが、いずれのプレゼンテーションも、今後どういった活動を行いたいかを見据えた発表であったことが印象的でした。

## ナショナル・プレゼンテーション

ナショナル・プレゼンテーションは、各国の参加青年が自国の歴史や文化、現在の社会問題などを、30 分間で映像や演技などを交えながら紹介するのですが、どの国も実際に力のこもった、それぞれの国の特徴や個性をいかしたすばらしいプレゼンテーションでした。またプレゼンテーションを終えた青年

たちの表情は、仲間と力を合わせることで一つの作品を作り上げたという達成感に満ちていましたし、他国の発表を見て互いに讚え合う光景も、とても微笑ましいものでした。プレゼンテーション終了後には、会場がまさに一体となって、国境や文化などの違いを超えて喜びを共有することのすばらしさを実感することができました。

### PYセミナーなど

PYセミナー（参加青年が目的に沿って自らの発案で実施するセミナー）や自主企画も、それぞれのイニシアティブに基づいて行われ、個性が發揮された特色あるものが多く、個々の参加青年の隠れた一面をうかがい知ることもできました。

また、参加青年たちの企画力や組織力のすばらしさにもしばしば驚かされました。例えば、船上プログラムの中盤になって急きょ自主企画として、自由時間を活用して各参加青年が歌や踊りなどの一芸を披露するという企画が持ち上がり、準備期間がわずか2~3日という限られた時間であったにもかかわらず、またたく間に実行に移され、趣向と演出にも凝った一大行事が繰り広げられるということもありました。

### 寄港地活動

那覇、大船渡・陸前高田における寄港地活動でも、事業の準備から実際の訪問活動に至るまで、多くの方々に御協力をいただきました。この場をお借りして改めて御礼を申し上げます。

訪問先では、お会いした方々からのおもてなし、期待を込めた言葉などをたくさん頂戴しました。特に被災地を訪れた際にいたいた、これから復興に必要な支援とは、多くの人々が関心を持ち続けること、忘れないことであるという言葉は、深く心に刻まれるものとなっています。むしろ参加青年たちの方が、住民の方々から元気をいただく場面も多く、非常に充実した交流活動を行うことができ、青年たちにとっても忘れられない思い出になったものと思います。

また、参加青年たちが各寄港地でお世話になった実行委員やローカルユースに対し、自主的に感謝の気持ちを伝えていたこともとても印象的でした。

### グローバルユースリーダー育成事業の意義に照らして

ここで改めて、グローバルユースリーダー育成事業の趣旨・目的について思い返してみることで、我々がこの事業を通じて得た経験が、事業の趣旨・目的とどのように結び付いているのかについて考えてみたいと思います。

この事業の趣旨・目的について、参加青年に配られた資料などには、次のような記述があります。

- 各国の外国青年とのディスカッションや文化交流を通じて相互理解を深める
- 異文化対応力やコミュニケーション力を高め、リーダーシップやマネジメント力の向上を図り、併せて参加青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神を育てる

別の言い方をすれば、グローバル化が進む中で国際社会に目を向け積極的に対応し貢献する活力のある逞しい青年を育成する、また国際的な友好親善の推進と人的な絆のネットワークをより活性化する、といったことが言えます。

ここからは、これらの趣旨・目的に照らして、この事業で得られたものについて、プログラムを一緒

に経験させていただいた管理部の一員としての観点から、考えてみたいと思います。

### (1) 青年たちの学びと成長

青年たちの成長度合いを見るためには、一定の集団を事業の初めから終わりまで追って行くことが最も効果的であることは言うまでもありませんが、参加青年全体の動きを把握する立場にある管理官として、特定の集団のみをフォローすることは難しいため、ここでは、各コースを一通り見て回り、全体のプレゼンテーション等を拝見し、あるいは個別の PY セミナー等を拝見した上で気付いたこと、感じたことを述べます。このため、かなり雑駁な内容になることを、あらかじめお断りしておきます。個々のグループの成果については、ファシリテーターの方々による報告などを併せて御覧ください。

また、青年たちの成長度合いに関する定量的な分析は、別途アンケート調査等を行っていますし、十分な期間であったのかなどについても、参加青年を始めとする諸々の関係者から意見を頂戴していますので、併せて参考ください。ここでは、青年たちの学びと成長につながっていると感じた事柄について、何点か述べたいと思います。

- 何よりも、普段はあまり接することのないタイプの青年たち、しかも様々な面で優れた能力を有している青年たちと多くの時間を共有し、互いに切磋琢磨することで、周囲から学び、自分を振り返る機会にあふれていたことは、参加青年の成長を促すまたとない機会になったことでしょう。東京で船を降りる際に、いつまでも離れがたく、末長い友情を誓い合っていた光景などは、そうした敬愛する仲間たちと出会えたことの証だと思います。
- NL たちの献身的な活動も忘れてはならないでしょう。各国参加青年たちのまとめ役として活動していただきましたし、既参加青年でもある NL を中心に、後輩たちの成長のために多くのきっかけ作りをしていただきました。こうした姿から青年たちは多くのことを学んだことだと思います。
- コース・ディスカッションの発表やナショナル・プレゼンテーションを見ていて強く感じたのは、いずれも全体として一つのまとまりを持っているため、よく準備され練られたプレゼンテーションであることが窺えるのですが、その過程をごく一部ですが拝見していると、誰かが一人で作り上げたというものではなく、各メンバーの貢献により一つの作品に仕上がっているということです。そうした貢献が引き出されているのは、メンバーが互いの意見や思いをよく聞き合うというプロセスを経ているからであり、その過程は、チームビルディングそのものなのではないかと思います。
- 参加青年は世界各国から集まっており、文化や物の考え方の違いは相当に大きいものがあったと思われますが、そうした違いを超えて、チームビルディングを行ったということは、異なる文化を理解し、試行錯誤しながらも対応してきたということであり、それぞれの参加青年にとって、異文化対応力が相当程度向上したのではないでしょうか。こうした経験は、今後大きな課題に取り組むに際して、参加青年たちの大きな財産になるものと期待しています。
- プログラム全体の開始から修了まで約 1 か月の事業であり、限られた期間内にコース・ディスカッションを始めとして様々な個々のセッションが並行的に組まれており、参加青年にとって一定の負荷はあったでしょうが、より多くの青年たちがリーダーシップを発揮する機会を得ることができたと思います。一つの集団で行動していると、リーダーとフォロワーが得てして固定してしまいがちになりますが、期間中に様々な活動が並行して行われることで、様々な場面で異なる青年たちがリーダー的な役割を果たしている場面を度々見かけることができました。

- ・ この事業の共通テーマは「青年の社会貢献」であり、参加青年がそれぞれ、この共通テーマを意識しながら活動していたということはもちろんありますが、被災地に対して「自分は何ができるか」と自問する青年たちの姿、あるいはプレゼンテーションの中での、自分がこれから取り組みたいことへの決意表明などから、この事業を通じて青年たちが社会に貢献しようという使命感や責任感を強めたと言えるでしょう。
- ・ 青年たちのコミュニケーション力やマネジメント力も向上したと考えられます。この事業のうち、特に船上研修ではプライベートな空間がほとんどないため、ディスカッションに積極的に参加し、各委員会活動で自発的に役割を担うように取り組まなければ、集団内の自らの立ち位置を見失いがちになります。事業期間中にそうした経験をした青年は少なくないと思いますが、事業の終盤のプレゼンテーションにおいて、どの青年も自らの言葉で自信を持って発言していた様子などを拝見していると、危機に直面していた青年たちも立ち直りを見せ、皆がコミュニケーション力やマネジメント力を發揮して、議論や事業の運営に前向きに参画していたことを窺い知ることができました。

### (2) 国際的な友好親善

この事業を通じて、いうまでもなく参加青年たちの国際的な視野は広がったと思いますし、国際的な友好親善にも貢献したと言えるのではないでしょうか。この事業においては、特に次の点を挙げることができます。

まず、日本では参加青年の代表団が皇太子殿下に御接見賜るとともに、安倍晋三内閣総理大臣を表敬訪問させていただくという、得難い経験をさせていただきました。

また、地方プログラムにおいては、各都道府県において、知事や副知事に外国参加青年を迎えていただくとともに、地元青年との交流やホームステイなどにより、絆を深められたことでしょう。

さらに、海外研修では訪問先の政府に歓待していただきました。各国では首相（ニュージーランド、トルコ）、閣僚級を表敬訪問させていただくなど、どの国でも日本の青年たちを厚遇していただきました。各国の青年たちとも積極的な交流活動が組まれたほか、ホームステイ・ホームビジットもさせていただき、おもてなしを受けました。

こうしたハイレベルな、あるいは草の根レベルの交流ができたことは、国同士の友好親善関係を深める点においても、青年たちの国際的視野の広がりという点においても、大きな意義があったと言えるでしょう。

### (3) 人的ネットワークの形成

人的ネットワークについては、その幅広さと強さの両面から書き記します。

世界各地から参加青年が集い、またこれから世界各地で活躍が期待される人ばかりであることから、こうした青年同士が幅広い人脈を築き、ネットワークを形成することができるということは、これから実社会において、様々な局面で仲間やパートナーと力を合わせながら活動を進めて行く青年たちにとってはもちろんのこと、その活動の影響が及ぶ周囲の人々や集団にとっても大きな強みであり、大切な財産になることでしょう。

加えて、その絆の強さも特筆すべきものがあります。度々触れていることがですが、この事業では、文字通り寝食を共にし、一日のほとんどの時間を共有していますし、とりわけ船上は場所の移動が容易な閉ざされた空間ですので、参加青年たちの絆はいやが上にも強まります。実際、ディスカッション・コースやレター・グループの仲間、同じ委員会のメンバーあるいはキャビンメイトたちと、

言わば修学旅行中のクラスメイトさながらに多くの時間を共有し、共に活動しており、別れ際に、自国を訪問する機会にはぜひ自宅に泊まってほしいと伝え合う青年たちの姿などにも、そうした強い絆を垣間見ることができました。

今回、海外研修において、過去の事業に参加した青年たちが受け入れ側として訪問国活動の中心的な役割を果たしている場面に度々遭遇しましたが、既参加青年がこうして積極的に協力していただいているのも、この事業に対する思いの強さ、既参加青年同士の絆の強さがあるからこそであると実感しました。

### 船で過ごすメリット

既に述べてきたことと若干の重複はありますが、ここでは船で事業を行うメリットという観点から考えてみます。

船には、長期間のプログラムに適している、外部との通信手段から一定期間途絶された状態で活動を行える環境にあるといったメリットもあると考えられますが、ここでは、実際に 12 日間乗船した立場から、ほかのメリットを数点、申し述べます。

これまで度々記してきたことですが、船は時空間の壁がほとんどない場所であり、24 時間貸切りでプライベートな場所もほとんどありません。このため、国境や文化の違いを超えてコミュニケーションを図る、短期集中で筋力トレーニングさながらにリーダーシップの育成を行う、あるいは末長い友情と人的ネットワークを築くなど、いずれにおいても絶好の場ではないでしょうか。

もちろん正規のプログラム時間中のディスカッションが重要であることは言うまでもありませんが、ほぼ四六時中、生活を共にし、自由時間にはいつでも友人と会える、こうした環境にいることで、日常の何気ない言動から相手の大切にしている価値観や考え方を知ったり、相手への敬愛の念が生まれたりする、あるいは時とともに共感を覚える場面が増える、こうしたことが効果を一層高め、青年たちの能力向上にも役立っていると思います。

また、実際に外国の方から言われたことですが、この事業は、将来を担う青年たちが国際的な結び付きを強め、互いに切磋琢磨を図るため、世界の様々な地域から、文化や考え方などが異なる青年たちが一つの船に乗り込んで行うプログラムがメインとなっており、このような事業を実施できるのは日本などごく限られた国ではないかということです。日本と友好関係にある国々の御協力を得て行われている事業であり、世界各国の友好親善関係の強化、更には国際的な平和の基盤構築という観点からも、大きな価値を見出すことができるのではないでしょうか。

### エピローグ

大勢の方々からいただいた多くの贈り物を積んだ船は東京・晴海港に帰り、その後の海外研修も含め、すべての事業は無事に終わりました。ギフトは種や苗となり、11 か国の大地へと移し替えられたところであり、これから大きく成長しようとしています。しっかりととした根を張り、立派な実を付け、新たな種が蒔かれるかどうかは、ひとえに参加青年たちの今後の弛まぬ努力にかかっています。

この事業を通じて得た経験やネットワークなどを糧に、積極的に社会に貢献しようという「SWY 精神」をしっかりと身に付けた参加青年たちが、自らの道を切り開き、眞のリーダーとなる日が来るのを心待ちにしています。

# 研修アドバイザー評価

齊藤眞理子

## 学びの中核と位置付けられるコース・ディスカッション

グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」は国際社会の各分野でリーダーシップを発揮し、社会に貢献する青年を育成することをコンセプトとして作られている。国際社会や地域社会で活躍するグローバルリーダーの育成が目的であり、そのために①異文化対応力やコミュニケーション力を高める、②リーダーシップやマネジメント力の向上を図る、③国際協調の精神を育て、社会貢献活動へ寄与する意識を高めることを3本柱としている。

グローバルリーダーを育成するために必要と思われる様々な活動がこれまでの経験と反省点を基に緻密に組み立てられている研修となっている。リーダーシップ・セミナーとプロジェクトマネジメント・セミナーにはそれぞれの分野でキャリアのある講師によるレクチャーが用意され、コース・ディスカッションにはそれぞれふさわしい経験を持つファシリテーターが当たった。この2種類のセミナーとコース・ディスカッションの学びがグローバルリーダーを育成するために中心に位置付けられている。中でも、コース・ディスカッションは海外研修の訪問国がそのテーマにより決まること、関東と沖縄での課題別視察があることも考えると、研修全体を通じて中核となる学びの機会であった。

## コース・ディスカッションの内容

研修アドバイザーの役割としてはコース・ディスカッションの企画・実施が1番目に挙げられる。

コース・ディスカッションは「国際化の進展する各分野でリーダーシップを発揮することができる青年の育成」と「青年の社会貢献」という共通テーマに対する青年たちの理解を深めると同時に青年が果たすべき社会的役割についての知識を深め、実践力の向上を図ることを目指している。

グローバルリーダーとして必要であると考えられた①異文化理解、②教育、③情報・メディア、④社会企業家精神、⑤ボランティア精神の五つのテーマが取り上げられた。さらに、それぞれのコース・ディスカッションを通じ参加青年たちが学びえたことをどういかし、社会貢献するかが強く意識される内容になっている。内容については各ファシリテーターによる報告を参照されたい。

## コース・ディスカッションの運営

### (1) 研修前

10月から日本参加青年のみのコース別メーリングリストが始まり、外国参加青年のコース分けが定まった12月からはすべてのコース参加青年が加わった上で英語でのやり取りに変わった。

メーリングリストによる事前のグループ作りは安心できるディスカッションの場作りとして大切なものだと考える。ファシリテーターから全体に向けて発信されたウェルカムメールと自己紹介の促しにより、コース・ディスカッションの場が温かいコミュニケーションの場へと作られていくのを感じた。9月に六日間の事前研修を行い、その後も自主的にグループで準備を積み重ねている日本参加青年とは異なり、1か月近い研修について不安を抱えている外国参加青年もいたのではないだろうか。グループ別の連絡と事前課題の提出のための手段なのだとと思うが、ディスカッション・グループのメンバーを互いに知る良い手段だと思う。

日本参加青年にはテーマ内容に関する知識補強のための日本語による課題と英語による課題が事前研修の際に与えられ、その後外国参加青年のコース分けが定まった後に、全員に向けて課題が課せられた。

8月に行われたファシリテーター会議、12月に自主的に行われたファシリテーター間の懇談会において経験のあるファシリテーターから、早く話しそうない、一人で場を独占しないなど初めにグラウンド・ルールを決めておくと良いこと、日本参加青年にとって話しやすい環境の作り方、発言のバランスの取り方などが共有された。

## (2) 研修中

コース・ディスカッションはオリンピックセンターにおける陸上研修で3回、船上研修期間に2回行われた。5回のセッションの内容に即し、なるべく均等に見学に入るようとした。昨年度よりコース・ディスカッションのグループが一つ多いので、一人ですべてを掌握することに多少難しさを感じた。

日本参加青年が意見を述べやすくするため、事前に発言ポイントを画用紙に書く作業を行ったり、相手の話を上手に聞く方法を必要に応じて紹介したりと、ディスカッションがスムーズに進むような工夫がなされていた。ほかにも出席の取り方、事前課題を基にした活動、机の配置、様々な教材教具の使用など細かい配慮が行き届いていた。途中で、参加青年からのフィードバックを得て、内容の微調整をしているファシリテーターもあり、限られた研修期間の中でも極力参加青年たちの意見を取り入れようという姿勢に頭が下がった。

全5回であったが、5回目はいずれのコースもサマリー・フォーラムの準備が主な内容となっていた。1回目はオリエンテーションに半分くらいの時間が費やされることを考えると、コース・ディスカッションはもう1回増やしたほうが良いのではないだろうか。

## (3) 海外研修

海外研修ではコース課題別視察の機会もあり、それぞれのコース・テーマに関して重要な気付きを得ることができていたことが帰国後報告会の内容から理解できた。海外における研修担当者と日本側の企画者との事前の入念なやり取りの成果であったと思う。

海外研修については、どのコースもチームとしてのまとまりができ、自分のコースが一番であると自負しているところが印象的であった。日々の振り返りを積み重ねることにより各人の気付きが共有され、コースとしての一体感が醸成されてきたものと思われる。安心してグループの中で自己表現できるようになり、積極的にリーダーシップをとれるようになり、以前の自分とは違う自分になったという青年の言葉に研修の一つの成果を感じた。

## 研修アドバイザーの役割

研修アドバイザーの役割の大きなものは前述したように、コース・ディスカッションの企画・実施に関するファシリテーターへの協力・助言（組み立て～事後活動の流れ）とされている。ただ実際にはファシリテーターが作り上げたものに対して分かりにくい点を聞く、気が付いたことを述べるなどにとどまつた。個人的には、それぞれの課題図書を読み、コース内容をしっかりと把握するように心掛け、見学時に気が付いたことをフィードバックすることで、貢献しようと考えていた。

残念に思ったことはファシリテーターが管理部員であり、研修アドバイザーはそうではないことであった。細かいことであるが、管理部員同士は管理部室において日々コミュニケーションが取れているの

に対し、研修アドバイザーは会議の場を設定しなければコース・ディスカッション全体の状況も把握しにくい組織となっていた。オリンピックセンターにおける陸上研修では昼食や夕食を共にすることができ、意見交換ができていたが、船上では食事の場所も管理部員とは別となっており（管理部の職員は決まった時間に食事がとれないため）、廊下ですれ違う時にあいさつをするくらいしか話す機会が取れなかつたことが悔やまれる。

ファシリテーターへの協力・助言が求められるのであれば、コース・ディスカッションが終了するたびに研修アドバイザーも含めた全体での振り返りを組んでおくことが必要だったのではないか。ただ、ファシリテーターはコース準備に忙しい上に、それぞれ管理部員としての責務も負っているので、負担になるだろうか。後になってファシリテーター間で助言をし合っていたことを知り、自らの責務を十分に果たせなかつたことを残念に思った。

## 1回目と2回目の講話内容と帰国後研修におけるワークショップの内容

陸上研修・船上研修のオリエンテーションの際にそれぞれ15分ずつ研修アドバイザーによる講話の時間が設定されていた。研修全体を見通して学びの全体像を青年たちに解説し、研修に臨む心構えを伝えることが研修アドバイザーとしての求められる役割なのだと理解した。

もう一つ、求められている大切な役割と理解したことは研修全体の学びを事後活動へつなげる役割である。帰国後研修の中で1時間の講義が組まれていたが、リーダーシップ・セミナー講師と協力して1時間15分のワークショップを企画した。

陸上研修のオリエンテーションの際の講話では、自己紹介のほかに研修全体の学びの構成、コース・ディスカッションの概略、目前にいる人との交流を大切にしようということを話した。

船上研修のオリエンテーションの際の講話では、船での生活の特殊性、キャビンのベッドの割り振りを題材にコミュニケーションの取り方とコミュニケーションパターンについて、さらに、今までの学びと事後活動への準備について話した。

ワークショップについてはリーダーシップ・セミナー講師と直前まで内容の吟味を重ね、①レター・グループ別に各自海外研修中最も心に残ったことの発表と、②今までの研修全体を通して心が震えた事柄を書き出し、ペア作業と個人作業を用い、自分自身がどのような事柄に強く心動かされるのか気が付くための活動を行った。

## 事業への提言

サマリー・フォーラム、帰国後研修における海外研修発表会における報告・発表は、今回の事業が与えられた条件をいかして、最善に近い成果をもたらしたことを裏付けている。一方で陸上研修、船上研修、海外研修というある種慌ただしいものだったため、距離的に遠方に位置するペルーへの派遣団はかなり無理を強いられる内容となっていた。実際、帰国の際の機内、帰国後研修中体調の優れない参加青年が多数いたことを報告しておく。実際、私自身も事業終了後数日してから体調を崩してしまった。今年度と同様の研修が来年度も計画されるのであるならば、海外研修先の選定の際に配慮がほしいところである。ただ、来年度は、比較的長期の船上研修が可能になると聞いているので、何よりである。

以下にその他、本事業をより良いものにするために気付いたことを列挙したい。

### (1) 研修アドバイザーの役割

研修アドバイザーは役割の分かりにくい立場だと改めて思う。この体制になって今年度で2回目

と理解しているが、何らかの改善が望まれるだろう。一つの案は五つのコース・ディスカッションの共通の目標である社会貢献活動を積極的に行ってきました人材を選択するということが考えられる。もう一つはセミナー講師のように事業全体に関わる専門を持つ人材の選択である。リソースペースンとして何を提供できるかが青年たちからはつきりとわかるような関わり方ができる人材がふさわしいと思う。前回乗船した際にはコミュニケーションパターンについてのセミナーを行ったのだが、そのような立場で臨んだ方が貢献しやすかったように思う。

#### (2) コース・ディスカッション後の会議の定例化

来年度も今年度同様1名の研修アドバイザーとファシリテーターという形で運営されるのであれば、前述したようにコース・ディスカッション後の会議を定例化することを提言したい。

#### (3) 研修期間中同行する研修アドバイザー・セミナー講師のPYとの関わり方

担当者間の振り返り会でも出ていたが、今回、リーダーシップ・セミナー講師は船上で必要と思われるタイミングで自発的にリーダーシップに関する一言を述べていらっしゃった。以前乗船した頃の朝礼は長すぎて参加青年たちに不評であったと記憶しているが、適切なタイミングで一言を述べるというのは同じ体験をしている青年たちには理解しやすい指針であり、大変有効であった。

#### (4) ファシリテーターの処遇

前述したようにファシリテーターはコース・ディスカッション準備・実施だけでなく管理部員としてのいくつかの責務も負っており、絶えず無線機も身に付け忙しそうにしていた。また、海外研修地においても重要な任務を負っていた。授業やセミナーの準備の時間はなるべく多くとるほうが良い。もう少し勤務時間を減らすなどの待遇が与えられても良いような気がした。管理部内の職務の分担については細かく分からないので、妥当な指摘ではない場合は無視して頂きたい。

#### (5) ファシリテーターの活用

ファシリテーターと参加青年たちとのより広範な交流を提言したい。今回、陸上研修オリエンテーション中に予定されていたファシリテーターによるコース紹介の機会が時間の関係で持たれなかったこともあり、本人が担当しているコース以外に属する参加青年たちには、ほかのファシリテーターを知る機会がなかったように思う。ファシリテーターは参加青年たちに年齢も近く、参加青年たちが目指す様々な経験を持つロールモデルでもある。コース担当のファシリテーター一人を知るだけでなく、それぞれのファシリテーターをより良く知ることは大きな意味のあることであるよう思う。例えば、ファシリテーターが半生の中の大きな選択について語る機会を設けるなどというのはどうだろうか。参加青年にとって下船後の生活に関わるヒントが得られるのではないだろうか。この提案も忙しいファシリテーターを更に忙しくするものであるので、新しい職務が加わる際には、ほかの職務の軽減をお願いしたい。

### 御礼

今回、本事業の研修アドバイザーとして貴重な経験をする機会を与えてくださった内閣府及び一般財団法人青少年国際交流推進センター、それぞれの担当者の皆様に心より感謝申し上げます。

第10回「世界青年の船」事業の7人のアドバイザーの一人として乗船後17年経った後にこのような機会に恵まれることは大変な幸せだと思います。私にとって大きな学びの場でした。ただ、十分に貢献できなかつた自分自身が残念です。

管理部の皆様、朝早くから夜遅くまで本当にお疲れ様でした。ファシリテーターの皆さんには、コース・

ディスカッションの企画・実施のみならず管理部員としての業務も担当され、とてもお忙しかったことだと思います。コースの始まる前から海外研修まで、コースの参加者を常に考えていました様子、教えられることが多かったです。ありがとうございました。

リーダーシップ・セミナー講師の榎本英剛さんには全体の事業を通じて関わってくださり、青年たちにリーダーとしての姿を示してくださったことを大変有り難く思います。

本事業は多くの善意の人々のたゆみのない努力によって支えられていることを再認識するとともに、グローバルな時代に多くの日本の方々が世界で活躍していらっしゃることを改めて知る機会ともなり、心強く思いました。ありがとうございました。

## 講師評価

榎本英剛

### 初めに

今年度の事業における新たな試みとして、これまでの研修アドバイザーに加え、リーダーシップを専門テーマとする研修講師がプログラムを通して参加することになり、過去に本事業に関わった経験が全くない私に白羽の矢が立てられた。私自身は過去10年以上にわたって主に30代から50代くらいの社会人を対象としたリーダーシップ研修などを行ってきた経験はあったが、今回は全員が30歳以下の若者が対象で、かつ言葉も文化も異なる11か国から集まった人たちを対象に英語で行うということに、事業未経験ということもあり、正直どうなるのだろうかという不安を抱えながらのスタートとなった。

### リーダーシップ・セミナーIにおける参加青年たちの反応

研修講師としての具体的な役割としては、陸上研修2日目における半日のリーダーシップ・セミナーIを行うこと、そして船上研修7日目に参加青年たちの主催で行われたリーダーシップ・セミナーIIにおけるサポートを提供することがあった。

リーダーシップ・セミナーIにおいては、まず日本を含む主に先進国と呼ばれる国々において、昨今リーダーシップについての考え方方が大きく変わってきてることをお話しし、続いてリーダーシップの「源泉」とも言える信念や志について個人レベルのものと集団レベルのものがあること、そしてその両者が交わるところを探っていく（一般的に「アライメント」と呼ばれる）ことの重要性を1対1の対話やグループワークを通して体感してもらった。

最初は半信半疑のような表情で聞いていた参加青年たちも、後半の信念についてワークする段になるとかなり盛り上がってき、最後は非常に高いエネルギー状態で終わることができた。特に共感を呼んだのは、「すべての人がリーダーである」ということ、そしてリーダーをリーダーたらしめるのは信念や志であり、それは誰の中にもあるという考え方であった。リーダーシップというと、特定の立場の人しか発揮できないもの、あるいは特定の人にしか備わっていない資質や才能というふうにとらえている場合が多くかった参加青年たちにとってこの考え方は新鮮だったようで、自分たちにもその気になればリーダーシップを発揮できる可能性があることを知って少なからず自信と希望を得た様子であった。

### 委員会メンバーによるリーダーシップ・セミナーII

リーダーシップ・セミナーIIは、リーダーシップ・セミナーIを受けて、日本及び海外の参加青年た

ち約 20 人からなるリーダーシップ・セミナー委員会のメンバーが企画・運営を担当した。

本研修に入って一から準備していたのでは間に合わないということで、日本参加青年たちが昨年 9 月の事前研修から下準備を進めてくれていたこともあり、彼らが提案した「ジョハリの窓」を核に据えた企画で進めていくことになった。委員会のメンバーはプログラム上あらかじめ割り当てられた準備時間以外にも自発的にミーティングを行い、その甲斐あって、かなり綿密なセミナープランが出来上がった。当日は、ほとんどの人が登壇し、登壇しなかった人も何かしらの役割を担うという形でまさに「全員がリーダー」として関わることができたと思う。一方で、全員の意見や意向を汲み上げようとする余り、若干内容が総花的になってフォーカスが絞りづらくなったのと、セミナーの参加者にもっと深く掘り下げてもらいたかったところで十分に時間が取れなかつたくらいがあったのは少々残念ではあった。しかし、結果として、参加青年たちが自分のことについて話し、また他者のことについても話すオープンな雰囲気をこのセミナーを通じて醸成することができたのではないかと思う。

### 参加青年たちに対するサポート

今回、非公式な役割として、参加青年たちが精神的に苦しくなった時のサポートを事務局から依頼されていたこともあり、食事の時間に話しかけたり、時間と場所を指定して相談に乗ったりといった工夫を研修アドバイザーの齊藤眞理子先生と共にこらしてみたが、とにかく参加青年たちに時間的な余裕がないこと、そして上記の工夫もあくまで非公式な位置付けでしかなかったこともあります、それほど有効に機能しなかった感がある。また、数は少なかったけれども、実際に相談に来てくれた青年たちの悩みを聞いてみると、プログラムの中で起きていることについてというよりも、プログラムが終わった後、特に自分のキャリアについてどうしたらいいかという相談が多くかったのが印象的であった。

参加青年たちに対するサポートという意味では、朝礼の時に時折数分程度の時間をもらい、リーダーシップ・スキルという観点からお話をさせていただく機会があった。具体的な内容としては、「助けを求める」と「自分の本当の気持ちとつながること」「意図を持って臨むこと」「今という時間を大切にすること」の重要性について話したのだが、その時必要だと感じたことをタイムリーに話せたので、短い時間ではあったが多少のお役には立てたのではないかと思う。

### 今後に向けての改善案

今回の経験を経て、いくつか今後に向けてのプログラム上の改善案が浮かんできたので、それについてもここで記しておきたい。まずは、あまりにもプログラムを詰め込み過ぎて、参加青年たちが自ら学んだことをしっかりと振り返り、統合する時間すらない状況なので、少なくとも夕食後の時間は基本的にプログラムを入れないようにすること。そして、朝礼の時間にその日のプログラムがどのような意図で組まれ、何を学んでほしいかを明確にした上で、本人たちにもその日の意図を明確にしてもらい、その日の最後にきちんと振り返りの時間を持つことをお勧めしたい。

また、「グローバルリーダー養成」と謳っている割には、リーダーシップについて学ぶ時間が十分ではないと感じた。朝礼の時にリーダーシップ・スキルについて話す時間をもらったのは、参加青年たちに対するサポートという意味合いもあったが、プログラム上いただいた時間だけでは十分に伝えきれないと感じていたからもある。同時に、今回はコース・ディスカッションのテーマの一つになっていた「異文化理解」はグローバルなリーダーを養成する上では欠かせない要素であるので、全参加青年に学ぶ機会を提供すべきではないかとも感じた。そこで、コース・ディスカッションを「縦軸」とした時に、

この「リーダーシップ」「異文化理解」に「プロジェクト・マネジメント」を含めた三つのテーマについては「横軸」として、コース・ディスカッションの場などで起きた生の題材を活用しながら学びを深めていくという構成にできたら、学びが単発的でなく、相互連関的になってくるのではないかと思う。

さらに、先ほど述べた参加者のサポートに関しても、今後はより公式的な仕組みにして参加青年に活用してもらいやすくなるよう工夫すると同時に、プログラム上で起きることだけでなく、事後活動を含めたプログラム後の人生やキャリアについても相談に乗れる体制を作れると本事業での経験が参加青年たちにとってより長期的な効果をもたらすものになると信じる。

## 各国ナショナル・デリゲーション・リーダー評価

### バーレーン王国

ジハッド・アルビンファラ

#### 参加青年選考

SWYAA バーレーン運営委員会により、70名の応募者の中から書類選考と個人面談を経て参加青年が決定しました。

#### 日本での NL 会議

NL 会議では、興奮と期待に満ちた雰囲気の中で、各国 NL が短期間で共同作業への基盤を築き、相互理解を深めることができました。

#### プログラム準備

新しい参加青年を対象に週に一回の研修ミーティングを行い、事業の詳細を伝え、事業のねらいと参加青年として期待されることについて徐々に理解を深めてもらいました。団で公式夕食会を開催し、プログラム前に家族を招待して顔合わせをしました。夕食会には日本国大使が御出席され、報道陣の出席する大使公邸でのミーティングに私たちを招いていただき、航空券もそこで渡されました。

#### 事業開始

ホームステイ・プログラムの今後の改善点として、ホストファミリーの選考が挙げられます。非常に短いプログラムでは、ホストファミリーの選考に英語力が求められます。コミュニケーションが困難なこと、参加青年との相互理解や文化交流の妨げとなります。ホームステイ経験は事業の基本的な部分として推進、強化していく必要があります。オリンピックセンターでのレター・グループ活動を通じて、外国参加青年と日本参加青年は互いを良く知ることができました。共同のバスルーム、限られた食事メニュー等、オリンピックセンターの宿泊規則には制限がありますが、実行委員チームはハラルなどのイスラム教の特別メニューを用意し、イスラム圏の参加青年に風呂とシャワーを個別に使わせてくれるなど最善を尽くしてくださいました。Wifi がつながりにくく、スマートフォンを利用できなかったのは困りました。成田空港で携帯のモデムを調達した団は、よりスマーズな生活ができました。次回からは、必要に応じてこのサービスが利用できるように、実行委員から NL に知らせておく必要があるでしょう。

その日のプログラムが終わった後にオリンピックセンターから外出できないことも、特に東京を散策

し、外で食事をとりたい外国参加青年にとっては問題でした。

優秀な講師陣による講義とセミナーにより、参加青年は多くの貴重な情報を得ることができました。

### にっぽん丸乗船

船上に集った日本人の既参加青年や家族と記念写真を撮ったり、夕食を囲んで交流したことは、私たちにとって非常に楽しく刺激的な経験でした。今後の事業では、オリンピックセンター滞在期間よりも、船上での期間をぜひ長くしていただきたいです。船内設備とサービスはすばらしかったです。船上スケジュールは、講義、ディスカッション、その他の活動が連日詰まっていて多忙でした。今年の事業は内容が濃く、参加青年は船上での時間を有意義に過ごし、短期間で知識と新しいスキルを獲得することができました。しかし、自由時間が十分ではなく、新しい交友関係を築いたり、交流することが難しく、参加青年は疲労気味でした。

### ナショナル・プレゼンテーション

バーレーン参加青年団は、デジタル映画とステージ・パフォーマンスを取り入れ、自国の過去から現在までの社会変化を視覚的に発表しました。ステージ・パフォーマンスでは、ラマダンのアラビアン・ナイトと伝統的な結婚式を表現しました。「交流のゆうべ」は事業のもう一つの重要な部分であり、各参加国団の創造性と才能を開花させ、チームとしての団結を深めるものでした。

### ディスカッション・グループ

ファシリテーターは見事な手腕によって、参加青年の学びを最高に高め、最も効果的に時間が活用できるよう、セッションを導いてくださいました。しかし参加青年が意見を共有し、自由に討論をするには、時間が足りないと思われるケースもありました。バーレーンは船上研修修了後の日本参加青年による訪問国一つであり、私たちは起業家精神についてのディスカッションを継続することができました。

### レター・グループ

レター・グループはメンバーの連携を深め、文化とアイディアを交換するために、あまり役割を果たしませんでした。今後の事業では、活動の基本であるレター・グループ活動を増やすべきでしょう。

### 自主活動とセミナー活動

自主活動はほぼ一日すべてが実施されたため、参加青年が創造性を思う存分に發揮し、才能やスキルを最高の形で共有することは難しかったです。今後の事業では、自主活動を船上のメインプログラムの一つとして重要視すべきです。

### 寄港地活動

寄港地活動を通じて、参加青年は日本の新しい側面を知り、訪問地の様々な文化と伝統を学ぶことができました。県関係者が船上で一泊してくださったことは、参加青年と地元の青年にとってすばらしい経験でした。二つの寄港地では、ローカルユースと参加青年が非常に活発に交流し、アイディアと情報を交換しました。

## 謝辞

日本の内閣府と管理部スタッフは、この事業の成功のために中心的役割を果たしてくださいました。各国 SWYAA の活動を通じて、各国がこのすばらしい事業の成功を今後もいかしていくことを願います。

## ブラジル連邦共和国

カミラ・カストロ・コバルスキ

既参加青年である私が、本年度の「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」の NL として参加させていただいたことを誇りに思います。世界の青年リーダーの育成を継続的に支援し、ブラジルを招いてくださった日本国政府に対し心から感謝いたします。

本年度のブラジル参加青年団は、国の様々な地域から 9 名が選ばれました。そのため、多様なメンバーが集まりましたが、事前研修においてはこれが課題となりました。しかし、これに関して SWYAA ブラジルが大活躍してくれました。

ブラジル参加青年は、訪日前からフェイスブック等のソーシャル・メディアを通じて他国の参加者とつながり、すでに事業に参加していました。

## ホームステイ

ブラジル参加青年団は地方プログラムで滋賀県を訪問しました。全員にとって初めての日本訪問で、多くのメンバーは滋賀県について知識がほとんどありませんでした。新幹線も初体験でした。電車の運行スケジュールの正確さとサービスの高さに、団員は感銘を受けました。

滋賀県の地元青年と IYEO メンバーは、大変温かく歓迎してくださいました。県庁訪問への道中で、地元の観光名所の琵琶湖に立ち寄りましたが、そこで初めて見る雪に団員たちは大興奮でした。世界の反対側に住む人々にとっては、四季があるのが当たり前ではないことを知り、地元青年は興味をそそられていきました。この経験は文化交流へのすばらしいきっかけになりました。

多くのブラジル参加青年にとって、ホームステイは日本人家庭で過ごし、その日常生活を知る初めての体験になりました。ホームステイのマッチングは非常に的確で（参加青年とファミリーが共通の関心を持てた）、参加青年はファミリーと心からつながることができました。

ホームステイはこの事業のハイライトの一つだと思います。ほかには類を見ない文化交流であり、参加青年が日本文化に深く入り込むことができる機会です。国境と時間を超えた友情の絆も深めてくれます。短い日程（二泊と中一日）でも成果は大きいのですが、少なくとも丸二日間以上にすることで、更にすばらしい成果が得られると確信しています。

## 陸上研修

セルフ・サービス施設であるオリンピックセンターは、ブラジル参加青年に新しいタイプの宿泊を示してくれました。共同生活、チームワーク、運営に関する大いなる学びの場でした。

陸上研修では、参加青年が様々な講義、セミナー、グループ活動、ディスカッションに取り組みました。これらの活動を通じて、互いの関心、職業、目標、性格を知ることができました。

リーダーシップ・セミナーとプロジェクトマネジメント・セミナーは、参加青年にとってスキルを学び、向上するための貴重な機会でした。実際、どちらのセミナーの質も非常に高かったと言えます。導入フォーラムは、参加青年が各自の社会活動を共有する時間でした。また、社会を大きく変えるための

意欲を互いに高め合うことに役立ち、コース・ディスカッションへの優れた導入となりました。導入フォーラムの運営企画はすばらしく、その目的を果たしていました。セッションを最大限にいかすことのできる運営でした。

## 船上研修

船上研修は全参加青年が待ち望み、最も密度の濃い文化交流とディスカッションに取り組むことができるプログラムです。オリエンピックセンターでの陸上研修と対照的に、リーダーシップ・セミナー、プロジェクトマネジメント・セミナー、サマリー・フォーラム、PY セミナー、自主活動等、ほとんどの活動が参加青年自身によって運営、実施されました。様々な船上委員会で、多くのブラジル参加青年が日本参加青年と共にリーダーシップ的な役割を果たしたことに満足しています。

## 寄港地活動

多岐にわたる寄港地活動は、船上研修と同様に事業の重要な部分です。沖縄県では、日本のあまり知られていない様々な場所を見る機会を得ました。第二次世界大戦中に大襲撃を受けた後、復興し、現在は観光と様々な産業により繁栄している町を訪れました。ローカルニュースと過ごした時間はかけがえのないひと時で、参加青年は皆、とても友好的かつオープンな態度で熱心に学び、教え、交流しました。短かったですが、幸運にも非常に密度の濃い時間を楽しむことができました。

岩手県では、課題別視察と人々との出会いを通じて、2011 年の津波被災者への賞賛と共感という強い感情が生まれました。私たちは訪問先の町についての学びを深めるとともに、その事例から、自身の防災と被災者支援に対する取組を振り返ることができました。二つの町について学ぶと同時に、人道主義、希望、予防、回復力についての教訓を得ました。この種の学びは、客観的に評価、比較できないものですが、将来、大きな成果をもたらす力があります—そのことを私は願っています。

## 提案

- ホームステイ・プログラムを少なくとも丸二日間に延長する。
- 参加青年の健康維持と全プログラムへの出席率を上げるために、船上の最終活動セッション（午後 8 時～9 時）の時間を見直す。
- 国歌斉唱とレター・グループ活動を朝の点呼に加えることで、参加青年に時間厳守だけでなく、関心と参加を促す。
- ナショナル・プレゼンテーションを一日で実施するのは、楽しいが疲れるので、これが変更できなければ、前日と翌日のスケジュールを軽くする。
- 毎日のレター・グループ・ミーティング以外のレター・グループ活動を増やす。
- 寄港地活動では最初に岩手県に訪問し、もっと時間をかけて津波で被害を受けた町を訪問する。
- ローカルニュースとの友情を深めるため、アイスブレイキングと余暇活動を増やす。

## 自身の経験について

NL としての参加は、大きな名誉とともに多大な責任を私にもたらしました。私にとって密度の濃い学びの時間となりました。コース・ディスカッションとセミナーの参加を通じて、飛躍的に成長できました。最後の数日は、常にリーダーシップ、企画、モチベーションのテーマに理論的に取り組んできま

したが、幸運にも様々な機会においてそれらを実践することができました。概して NL としての自身の成果に非常に満足しています。団員は積極的に活動に参加し、事業のルールを守り、レター・グループは、高いレベルの友情とチームワークを育むことができました。

## まとめ

グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」は、理論的、実用的、文化的に多大な成功を収めている事業であるという言葉で、このレポートを締めくくりたいと思います。この事業は、私たちに大きな学びをもたらし、新しい知識を実践するための機会を与えてくれます。また、各国間で育まれた友情は、末長く大切にされていくでしょう。皆さんとにっぽん丸に別れを告げることはとても辛いです。この数週間の出会いと様々な文化の共有を通じて生まれたエネルギーが、世界を良い方向に変えてくれることを願ってやみません。「私たちが世界を変える」という気持ちが、これからも私たちの背中を押し続けてくれますように。

## インド

リツパーナ・バルア

“Vasudeva Kutumbakm” とは「世界は家族のように一つになる」という意味のサンスクリット語ですが、「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」はまさにその成功事例です。セミナー、リーダーシップ活動、自主活動、自己啓発コース、異文化理解、国際的な絆、完璧な時間管理など、世界でも例を見ないプログラムです。

この事業は、参加青年の人格形成を助け、それぞれの人生に様々な興味深い事実を付け加えてくれます。

陸上研修は、世界中から多くの優秀な天性のリーダーが参加する非常に効果的な研修です。特にローカルユースとの交流を活発に行い、自然災害による被災者の困難な生活について知ることができました。参加青年は日本人の心構えと生活について学び、分析することができました。

また、ホームステイ・プログラムでは、日本人の生活様式と文化について理解を深め、具体的に知ることができました。

皇太子殿下御接見、日本の内閣総理大臣表敬訪問は大変な栄誉でした。

このようなすばらしい事業を実現し、成功に導いてくださった日本国政府、管理部、参加青年の皆様に感謝いたします。この事業は、本年度事業の全参加青年が国を超えて強い絆を結ぶきっかけになりました。

私たちは参加青年としてリーダーシップ・スキルを発揮し、ナショナル・プレゼンテーションのタレント・ショーを通じて団の結束を固めました。このすばらしい機会を与えてくださったインド政府にも心より感謝いたします。

本事業が、各国に変化をもたらす次世代の青年を生みだすことを確信しています。本事業で私を支えてくださった皆様に感謝いたします。ジャイ・ヒンド!!!

## 日本国

NL 馬場佳子

始めに

このすばらしいプログラムに、1998年の第10回「世界青年の船」事業に一日本参加青年として参加して以来、再び参加できることを大変嬉しく思います。そして今回は、日本の参加青年を代表するNLの命を受けての参加を誇りに思うとともに、一参加青年として参加した過去とはまた違う経験と学びが待っているに違いない、と興奮と少々の不安を胸に、昨年9月の事前研修から10月のNL会議を経て、本プログラム開始の1月までを過ごしました。

さて、私が参加した1998年から十数年もの歳月が過ぎており、それとともに、プログラムも大分変わりました。まず、プログラム期間が大幅に短縮され、それとともに海外航路から国内航路へと変更されました。これらの変化に伴う私の不安を他所に、本事業は短期集中的に、その目指すところに達し、大成功に終わりました。本事業は全参加青年にとって一生に一度の、そして人生観をも変え得る経験です。この1か月のプログラムの間に共に育んだ精神は、世界各地の参加青年による事後活動によって反映され、これから先も長く育まれていくことでしょう。ここに、私のNLとしての経験と、参加青年たちが陸上・船上での研修にて、何を学び、何を得たのか、何が本事業を成功へと導いたのかを、私の観察視点から書き留めたいと思います。そして今後の同プログラムの大いなる発展を願い、幾つかの提案をしたためさせていただきます。

### 日本参加青年のトレーニングとディベロップメント

事業全体を評価するに当たり、昨年9月に日本参加青年が初めて一堂に介した、オリンピックセンターにて行われた事前研修まで振り返りたいと思います。

この五日間という短い期間での研修ではありましたが、翌年開始される本プログラムにおけるコース・ディスカッション、各委員会、セミナーやナショナル・プレゼンテーションのための貴重な準備期間であるとともに、このプログラムに参加するに当たり、彼らに何が不足しているのかを認識させ、同時に、それらに対する彼らの向上意識を高めることができたこの事前研修は、それぞれの参加青年にとって、本事業を成功へと導くために、非常に重要な五日間であったと思います。具体的には、英語でのコミュニケーション能力と、それと関連して、世界10か国から集まつくる多国籍かつ多様な文化を持つ青年たちとどうやって対峙していくべきか、という自問自答です。この事前研修期間中には、いくつもの涙を目にすることができました。それは、自分の意見や思いを英語で表現することのできないことへの苛立ちと、そんな自身への怒りであったようでした。しかしながら、そんな苛立ちや怒りが参加青年一人一人に、事業開始に向けて新たな目標を設定させ、それに向かってコンフォートゾーンからストレッチゾーンへと自分を押し出す結果を生み出した事前研修でした。このような自己成長のプロセスは、日本参加青年にとって3か月後に始まる事業を実りのあるものにするために必要不可欠なものであり、そういう観点から、9月に行われた日本参加青年のみの事前研修は非常に意味のあるものであったのだと認識せざるをえません。

外国参加青年を迎えて始まった陸上研修は、船上研修に向けて各委員会やコース・ディスカッション、セミナー等を、新たに加わった外国参加青年たちと共に最終準備を進めるに当たり十分な準備期間となりました。また、レター・グループで行われたスポーツリクリエーションと都内視察は、各レター・グループ内のチームワークの促進、そして参加青年同士の結束と絆を強めた活動でした。特に都内視察に関しては、昨年9月の事前研修の時点から日本参加青年がレター・グループごとに計画して実行したものであり、彼らが綿密に立てたスケジュールに従って多国籍多文化の参加青年を引率、リードすることのできたこのプログラムは、日本参加青年にグローバルなリーダーシップ・スキルを養った一日であつ

たと理解します。

世界各国の青年によって実際に行われている事後活動の一部を紹介した導入フォーラムは、本事業の終了がこのプログラムの本当の終着地点とは程遠く、これからより良い未来を共に築いていく旅のほんの始まりに過ぎない、という、事業の本来の目的と根本的なアイディアを理解してもらうのに重要なセッションであったと思います。そして、現時点、既に幾つかの事後活動が行われているように、ますます、今後の活発な事後活動に期待を寄せています。これが、SWY 精神の本質なのです。

寄港地活動は、日本参加青年・外国参加青年共に、最も深く大きな影響を与えた経験でした。特に、大船渡市と陸前高田市への寄港では、参加青年たちは津波の災害を受けた人々を訪問する中で、彼らが受けた災害についてのみでなく、現在の状況や心境を知るとともに、前に向かって進もうとする姿、生きようとする強い意思を目の当たりにし、深く心動かされているようでした。こうして、参加青年たちは、実際に被災地の人々と触れ合うことで、地域の人々の連帯と、回復しようとする強い力を肌で感じた経験となったようです。これらの経験は、過去を振り返るばかりではなく、これから世界で起こりえる自然災害が起った時、どのような形で対応していくべきなのか、また、援助できるのか、未来に向けた目を養った寄港地活動でした。

プログラム期間中には、各寄港地を始め海外研修においても、公式レセプションがあらゆる機会に行われました。将来を担う若いリーダーたちにとっては、こういった公式レセプションに彼らの人生のキャリアの早い段階で参加できたことは、世界に通用する礼儀作法とプロトコールを肌で学ぶのに良い機会となったのだと思います。

## NL

事業開始に先立って NL 会議が東京で開催されたのは昨年の 10 月のことでした。各国からの NL が招集されてのこの四日間の間には、もちろん事業概要の説明もありましたが、それだけに留まらず、NL 同士で我々の職務と責任について話し合い、幾つかのトピックに対して、事業がスムーズに運行されるための規則・規律など、NL としての決定事項を取るまでに至りました。この短期集中型で行われた会議は、プログラムで各国をまとめるリーダーとなるメンバー同士が強い絆を築き、一つのチームとして確立できたこと、これは、NL が一つの団結したチームとして機能するのに必要不可欠なことであったと思います。振り返ってみると、私たちはとても素早く NL チームとして一つに団結しました。これには、内閣府、(一財) 青少年国際交流推進センター、IYEO のスタッフの皆様の甚大な前準備と、惜しみない協力と継続的な理解があってこそ、NL の団結であったことに疑いはありません。

可能な限り迅速に 11 の異なる国のそれぞれの NL が一つの凝集したチームを作り上げたことは、本事業の成功には不可欠だったといえるでしょう。この点では、私たちは非常に効率的に機能しました。事業の開始以来、参加青年の間で発生した問題や課題は速やかに毎日開かれる NL 会議で話し合われ、解決へと導きました。また、必要に応じて、関係国の NL が、関連する参加青年と個人的に話し合いの場を持ちました。場合によっては異なる文化が原因で発生した問題などについては、相互の異文化理解に至るまでフォローアップし、平和的解決へと導きました。

一方で、私たちは、規律や時間厳守の促進やインフルエンザ防止のための健康な生活の促進などの、一般的な NL の仕事の枠にとらわれることなく、NL であることを楽しみながら、イベント「SWY Got Talent (タレント・ショー)」の提案や、にっぽん丸のデッキでの全体集合写真の撮影を計画し、歌を作曲し、「SWY Got Talent」で NL によって自ら披露するなど、NL として、様々な面を打ち出してきました。

た。将来のリーダーを育成することが目的であるこのプログラムで、NL は彼らのロールモデルであるべきです。そういった視点においては、NL が一丸となって、事業の成功という共通のゴールを目指して、共に働き、互いにフィードバックを与え、助け合い、協力し、常に互いに公平な立場でリードしてきた私たち NL は、参加青年の良きロールモデルとなっていたもの、と自負しています。

私たちは、本事業が最高なものとなるよう、管理部の方々と共に連携して、全参加青年をリードしてきました。全プログラムを通して、これを達成できた裏には、管理部の方々の継続的な後方支援と理解、そしてあらゆる機会において柔軟に対処してくださったことに大きく因るところがあり、感謝の意を表したいと思います。

### 海外研修（スリランカ）

私が参加した海外研修は、スリランカのボランティア精神コースでした。1 週間の海外研修は、多くの機関訪問や活動が綿密にプログラムされており、非常に集中した実り多い研修となりました。これらの密なるスケジュールを可能にするために多大な努力をしてコーディネイトをしてくださった内閣府、（一財）青少年国際交流推進センター、スリランカの青年省、SWYAA スリランカ、在スリランカ日本国大使館、スリランカの参加青年には、ここに敬意を表したいと思います。現地でのホームステイ、地元の青年との議論や意見交換、そして様々な活動を通じて、日本参加青年は、スリランカの青年たちが彼らの地域社会や国にどれだけ興味を示し、貢献しているかを学びました。それは、青年の活発な政治参加や社会課題への取組などに代表されるものです。更に、地元の青年との活発な議論と Q&A セッションでは、日本の青年が自国の政治に比較的無関心であり、社会的な課題への関心に欠如していることを認識させられました。よって、私たちは未来を背負うリーダーとして、何をすれば良いのか、自分がどう変われば良いのか、といった課題をスリランカの青年たちの中に学ぶことができました。

### 帰国後研修

帰国後研修の中で最も有益なセッションは「報告会」であったと思います。それは、コース・ディスカッションで学んだことをベースに、各日本参加青年が海外で新たに見て感じて体験して得た経験を、陸上・船上研修で学んだ「リーダーシップ」とリンクし、そこに落とし込むまでグループ内でディスカッションをし、発表までもっていくという公式全体発表会です。日本参加青年が海外で学んだことのみでなく、本事業のテーマであるリーダーシップとリンクさせることで、この発表会は、単なる「海外研修発表会」ではなく、事業を通しての総合的な学習成果をまとめた発表会となるのです。近い将来、自ら選択したコース・ディスカッションのテーマに沿って、彼らがリーダーとして何をしたいのかを発表するこの発表会は、二日以下という短い期間で各コースが団結してまとめ上げ、すばらしい発表会となったことを大変嬉しく思います。

### 今後にむけての提案

すべて上記の考察の通り、このすばらしいプログラムの期間が延長されれば、参加青年の大いなる利益になるのは火を見るより明らかです。なぜなら、彼らがプログラム中に直面する問題に対して、しっかりと立ち向かい、課題に取り組むための十分な時間が持てるからです。これによってそれぞれの学習過程と成果をしっかりと吸収し、自分の糧とするとできると考えるからです。また、寄港地に於いても滞在日数を少々延長することを提案します。なぜなら、全プログラムの中でも寄港地活動に一番影

響を受け、最も有意義で人生を変えるほどの経験をした、と多くの参加青年からのフィードバックを耳にしたからです。

さらに私は、“全体的なプレゼンテーションスキルを上達させる”ためのワークショップを増やす、又はメンターシステムを導入することを提案したいと思います。いくつかの PY セミナーや自主活動に参加しましたが、彼らが、彼らのプレゼンテーションについてアドバイスやフィードバックをしてくれるメンターがいれば、参加青年にとって、更に有益なものになると確信しています。例えば、配布資料有無のアドバイス、プロフェッショナル（スペル間違いのない）かつ効果的なパワーポイント（PPT）の作り方、（PPT はシンプルに、そして肉付けは口で説明しながら補っていく）など。非常にシンプルな以上の点に留意すれば、観客の興味をひきつけるプレゼンテーションになることでしょう。

プレゼンテーションにおけるタイムマネジメント、プロフェッショナリズム、セルフ・プレゼンテーション、ボディランゲージ、声のトーン、アイコンタクト、表情、そして異なるプレゼンテーション・スタイルの導入：以上の要素を取り込み、プレゼンテーションをよりすばらしいものとするため、また、この機会にプレゼンテーションのノウハウを学ぶために必要なのは、スキルを上達するためのアドバイスではないかと思います。メンターシステムがあれば、このせっかくのグローバルな環境で行えるプレゼンテーションがより良いものとなり、学びも大きいものとなるに違いありません。

## 最後に

私自身が「世界青年の船」事業の既参加青年であり、今回、NL として参加し、改めてこのプログラムのすばらしさを実感しました。前筆しましたように、本事業の真なる目的は、プログラム自体で学びを得ることだけではありません。このプログラム終了後、参加青年一人一人が既参加青年として、SWYAA にて事後活動を通じ社会貢献をしながらより良い未来を共に作り上げていってほしいと思います。私が参加した 17 年前に比べると、ソーシャルネットワークの普及・発達により、世界をつなぐネットワーク構築・維持が容易になりました。この参加青年間の強いネットワークを通じて、各青年の「人生を変え得る経験」が、全参加青年の「世界を変え得る経験」となることを望んでいます。

最後になりましたが、改めて、本事業を実現可能にするため、そして最大限の実り多きものにするために多大な努力をしてくださった内閣府、そして（一財）青少年国際交流推進センター、IYEO の方々、研修アドバイザー、講師、ファシリテーター、看護師、通訳、そしてにっぽん丸スタッフの方々に心より御礼申し上げたいと思います。そして、今後の本事業の大きいなる発展と、既参加青年となった本事業の参加青年、そして将来、このプログラムに参加するであろうすべての青年に、ここに声援を贈りながら、このレポートを締めくくりたいと思います。

## 日本国

SNL 後藤宏樹

### 序論

初めに、内閣府グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」へ多大なる御協力をくださいました、内閣府の皆様、日本青年国際交流機構の皆様、管理部の皆様、研修アドバイザー及び講師の皆様、にっぽん丸の船長及びクルーの皆様、寄港地で訪問させていただいた沖縄県の皆様、大船渡市と陸前高田市の皆様、そしてこの事業を支えてくださったすべての皆様に、日本参加青年を代表して、厚く御礼申し上げます。

私共、11か国から集まった204名の参加青年は、公式セミナープログラムや、5コースの専門分野ごとに分かれたコース・ディスカッション、各国の文化を紹介するナショナル・プレゼンテーションや互いの文化を学び合う自主活動などを通じて、交流を続けてきました。本事業の参加青年は、共に学び、リーダーシップ・スキルの習得に努め、また言葉や文化の壁を越えて、強い友情を育んで参りました。

国際問題を考える上で、国や文化や宗教を超える友情は、課題解決の重要な土台となる一つの要素です。この経験は、私たち日本人だけでなく、外国参加青年にとっても非常に貴重な経験となり、世界の未来に貢献する力となり得ると、私は強く信じています。このような貴重な事業は、世界を探してもほかに類を見ないプログラムであり、特に西欧と中東、アフリカ、アジア、南米の青年たちが一堂に介し、同じ食事を食べ、国の壁を越えて語り合う経験は、参加青年たちを、世界をより良い姿へと変えていく“種”に変えていく力があると私は確信し、事業に臨んで参りました。

## NL会議

2014年10月27日から29日までの三日間、内閣府庁舎にて、11の参加国から集まった12人のNL会議が開催されました。私たちは、内閣府の皆様及び管理部の皆様の御指導の下、本事業の目的、安全面や健康面の管理についてやNLとしての心得を確認し合い、本事業の成功を祈りました。三日間程の顔合わせでしたが、私たちはこの会議を通じて、各自の能力やこの事業に対する想いを確認し合い、とても強いチームワークを結成することに成功しました。この時点で、NLに強い結束力が生まれたことは、後の本事業でのNLミーティングを潤滑に進める上で、非常に大きな力となりました。

## 陸上研修

2015年1月26日から2月1日まで、東京のオリンピックセンターで陸上研修が開催されました。

### (1) NLアイスブレイキング

NLの先導によって、日本参加青年と外国参加青年が出会い、文化や宗教の違いを越えて、互いを知り合う初めての公式時間でした。互いに、少なからず不安がある中で、このアイスブレイキングは互いの距離を縮め、非常に大きな効果を生み出す時間になりました。今回は、外国参加青年が地方プログラムから夕方頃に戻ってきて、オリエンテーションを受け、夕食を食べてからのアイスブレイキング・セッションになりましたが、夕食時間での交流をより深いものにするには、先にアイスブレイキングを行って夕食を共に食べ、それからオリエンテーションでも良かったかもしれません。

### (2) コース・ディスカッション

私たちは、それぞれ五つのテーマごとに五つのチームに分かれ、各コース・テーマの議論を行いました。本事業の中でもコアとなるプログラムで、非常に充実したものになりました。しかしその一方で、短い期間の中に凝縮しているため、各テーマを奥深く理解するには、時間が十分ではありませんでした。大変難しい調整だとは思いますが、もし仮に事前に外国参加青年たちのバックグラウンドや、各テーマに対する問題意識などを知って、学習していれば、より深い議論になっていったのかもしれません。私は、ぜひ次期参加青年たちには、コースごとの学びに留まるのではなく、各ディスカッションが終わるごとに掲示板やメーリングリストを使って、議論の内容や成果を共有して、より広く深い学びを体験してほしいなど願ってやみません。

### (3) プログラム日程と休日

私たちは、陸上研修の間で半日間の休日をいただきましたが、参加青年たちはこの半日で非常にリフレッシュしていました。というのは、私たちはオリンピックセンターで七日間過ごしましたが、実際にその期間は長く感じられ、参加青年たちも、より開放的な空間を望んでいました。オリンピックセンターで七日間過ごすのであれば、例えばスポーツ時間やゲームの時間をもう少し取り入れ、時には午前中の始め授業1時間を、体を使ったゲームにするなど、頭と体の運動ができる時間にしても良かったかなと思います。そうすることで、その後の授業への集中力も養えるかもしれません。

## 船上研修

2015年2月2日から13日まで、にっぽん丸での船上研修が行われました。

### (1) ナショナル・プレゼンテーション

本事業の一つのハイライトである、ナショナル・プレゼンテーション。各国青年は、それぞれの国の文化や歴史、政治や経済背景などを紹介し、伝統的な踊りや歌と共に披露しました。このナショナル・プレゼンテーションは、参加青年たちをより強く結び付けることになり、参加青年たちも様々な文化の中にいるにもかかわらず、より快適さをその空間に感じるようになっていきました。11の参加国の大代表團は、すべて一日で各国持ち時間30分で行われましたが、一日ですべてをやるにはやや一杯になる傾向があり、場合によっては、二日間に分けても良かったように思えました。

### (2) 寄港地活動 大船渡

参加青年は、2011年3月11日の東日本大震災で大きな被害を受けた大船渡市及び陸前高田市を訪問しました。レター・グループごとに行動し、現地の人々に会い、また被災地で復興を目指している現地の人々の姿を目の当たりにしました。彼らは、とても強い意志を持っており、むしろ私たちが彼らの姿から勇気を頂きました。また一方で、この事業に参加している外国参加青年たちの中にも、インド、スリランカ、トルコ、ペルー、そしてニュージーランドなど、過去に大きな震災を経験している国々から来ている人々もいます。大震災は、今後世界中でより大きな問題となることが予測され、私たちは災害から身を守ることや、震災の被害と恐ろしさを各国に伝えようと決意しました。

### (3) 船上でのコミュニケーションにて

船上でのコミュニケーションを通じて、参加青年たちはより仲良くなり、ときにはより深い話もし始めていました。私のところにも、何人かの外国参加青年が相談にやってきて、ハーフや混血の彼女らは、自分のルーツを探していると言っていました。いわば、外国参加青年の“自分探し”的な相談役になっていました。実際、本事業にはかなりの数のダブルやミックスカルチャーの参加青年がいて、今後世界中でこういったダブルやミックスが増えていくことは安易に推測される中で、自分たちのルーツやアイデンティティーの在りかを探し始める動きは、非常に興味深いものでした。また、今後世界の大きな課題の一つにも発展してくるのではないかでしょうか。

## 海外研修（日本参加青年のみ）

2015年2月14日から21日まで、日本参加青年のみの海外研修が行われました。日本参加青年は、コースごとに、バーレーン、ニュージーランド、ペルー、スリランカ、そしてトルコの5か国に分かれ、現地で研修を行いました。各種政府機関への訪問や、ホームステイ、ローカルユースとの交流を通じて、

グローバルリーダーとしての素養を培いました。

## 結言

この事業を通じて、世界中から集まった参加青年たちは、強い友情を育み、私たちは、文化や宗教や言葉の壁を越えて、互いに分かり合えるんだということを学びました。また、これからグローバル社会で必要となる、グローバルリーダーとしてのリーダーシップ・スキルを培い、社会の一員であるという意識もより深く持ちました。このように、西欧と中東、アフリカ、アジア、南米の青年たちを一堂に介して友情を育む事業は、世界中を探しても、ほかに類を見ません。

最後に、私は本事業で“SWY 精神”を学んだ、今は“種”である未来のリーダーたちが、いずれ立派な“木”に成長し、そして、世界中で成長したその木々が、再び集まって“森”を作り、世界をより良い姿へと変えていく日を、夢見てやみません。そして、私もその木々の1本となることをここに誓い、平成26年度内閣府グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」の日本代表サブNLを務めさせていただいた私、後藤宏樹の事業報告書とさせていただきます。

本事業を支えてくださった、すべての皆様に、改めて、こころより厚く御礼申し上げます。

## ケニア共和国

ローズ・デュング・カツモ

### 始めに

グローバルユースリーダー育成事業は、永遠に私の記憶に刻まれることでしょう。私の人生で最も大切な時間は、昨年10月27日から29日に東京で開催されたNL会議に日本国政府により招へいされた日から始まりました。私は大喜びするとともに、家族、友人、仲間から受けたたくさんの祝福の言葉に圧倒されました。私ができることは、みんなの信頼に応え、一步を踏み出しベストを尽くすことのみでした。ケニア団は、第4回、6回、8回、10回、14回、17回、18回、22回、25回に続き、今回が10回目の参加に当たります。今年度のケニア以外の参加国は、バーレーン、ブラジル、ニュージーランド、トルコ、オマーン、ペルー、スリランカ、トルコ、英國、主催国の日本でした。

### 出発前準備

ケニア参加青年団の出発前準備は、NL会議にて始まりました。NLとしての役割と事業の詳細について、三日間ディスカッションを重ねた後、私は熱い思いを胸に出発前準備に着手しました。まずは関連組織（政府青少年対策担当、国家青少年協議会、SWYAA ケニア）にレポートを提出することから始め、導入ミーティングでは、既に推薦が決まっている参加青年を集め、事業と各団への期待について話し合いました。様々なチーム活動を企画し、各自の役割を決め、参加青年は皆期待に胸をふくらませました。提案を作成し、資金調達戦略を練り、チームを支援していただける様々なステイクホルダーを特定しました。

2名の参加青年が仕事の都合で交代したことを除き、初期の企画会議は順調に進みました。しかし、既参加青年からの情報が錯綜したこともあり、チームの結束に亀裂が生じそうになりました。これは私にとって事業を通じて直面した最も大きな試練の一つであり、準備にマイナスの影響を与えました。慌ただしい中、私は渡航に必要な書類を紛失し、予定の飛行機に乗ることができませんでした。御迷惑をおかけしたことをお詫びするとともに、フライトの際手配をしてくださった関係者に感謝いたします。

## 活動

事業における活動は陸上と船上で実施され、様々な活動の合間に多くの研修が含まれていました。私は一日遅れで到着したため、空港で他国の参加青年団と出会う楽しい瞬間に立ち会えませんでしたが、幸運にも歓迎レセプションには間に合いました。温かく出迎えていただき、すべての運営がすばらしく、快適に落ち着くことができました。翌日より二日間の地方プログラムが始まりました。各参加国団はそれぞれの地方でホームステイに参加しました。ケニア参加青年団と英国参加青年団は宮崎県を訪問しましたが、控えめに言っても胸が躍る旅でした。羽田空港への移動は非常にエキサイティングで、宮崎行きの飛行機から眼下に島々の美しい景色を臨むことができました。人生でこのような経験ができるとは夢にも思っていませんでしたが、待ち受けていたのは言葉では言い表せないような経験でした。

これが私にとって、普段着の日本文化に触れる最初の時間でした。最も心を打たれたのは、宮崎の人々の謙虚さと温かさ、そして親切さでした。生目小学校訪問、フラワーガーデン訪問（近所の人が一緒に参加し、私たちとの出会いを大変喜んでくれました）、美味しいランチ、知事表敬訪問などを行いました。華やかなレセプションの後、ホストファミリーとステイ先に向かいました。ホストファミリーの長峰さん一家は、二日間私を家族の一員として迎え入れてくださいました。私は「バラ」というニックネームを頂いて、食事をごちそうになり、観光地、神社、浜辺までドライブに連れていっていただいたり、着物の着付けまで教えていただいたりしました。私にとって、日本文化を誇りに思い、高く評価する理由が十分できました。

ホームステイ先から帰京し、その後十日間宿泊するオリンピックセンターに移動し、チェックインしました。導入フォーラムの後、様々なコースの研修が始まりました。同時に、リーダーシップ・セミナー、プロジェクトマネジメント・セミナー、PY セミナー、国際連合大学訪問、コース・ディスカッション別及び課題別視察、レター・グループ別の都内視察、スポーツ・レクリエーションなどの研修に参加しました。最も印象的だったのは、NL による安倍晋三内閣総理大臣表敬訪問と赤坂の皇居における皇太子殿下御接見でした。最も記憶に残ったことは、雪が降った日のこと（初めて雪が降るのを見ました）、インフルエンザ流行でマスクを着用したこと、手洗い方法のデモンストレーション、チェックアウト前のベッドリネン類のたたみ方などです。

船上研修は最も興味深く、私も含めて多くの参加青年は、事業の残りの日々を過ごす家となる「にっぽん丸」で航海に出るのが待ちきれませんでした。船は寄港地の沖縄県那覇市、岩手県大船渡市と陸前高田市を訪問しました。にっぽん丸船内は、私たちの期待を裏切れませんでした。避難訓練の後、私たちは心を躍らせながら趣味の良いインテリアのキャビンに落ち着きました。

私たちは研修の続き、国別ナショナル・プレゼンテーション、インターナショナル・ナイト EXPO、自主活動、ミニ・プレゼンテーション、サマリー・フォーラムなどの活動を行い、各寄港地ではローカルニュースと船上で二日間過ごしました。沖縄県は温暖ですばらしく、参加青年はアメリカと中国の影響を受けた豊かな文化に触れました。

もう少し長く沖縄に滞在したいとどんなに願ったことでしょう！涙の見送りとともに船のデッキから投げられた色とりどりのリボンが切れ、船は一路北を目指しました。荒天の航海で、多数の参加青年が船酛いに悩まされたにもかかわらず、私たちの高揚した精神と大船渡市と陸前高田市に到着することへの期待は失われることはありませんでした。これから訪問するのは 2011 年の東日本大震災により甚大な被害を受けた二つの町なのです。私たちはビデオ・クリップ映像を見てその恐ろしさに言葉を失い

ましたが、被災地と住民の復興への取組の現状をリアルに思い描くことができる者は一人もいない様子でした。朝の8時頃到着し、現地の人々の温かい歓迎を受けました。彼らはトラウマになるような経験をしているにもかかわらず、想像以上に強い人々でした。

課題別視察でローカルユースと被災者と過ごしましたが、最も心を打たれたことは、彼らが自分たちのためだけではなく、世界の隅々にいるすべての災害被災者のために活動を行っていることでした。彼らの話に人々が耳を傾け、対策を立てることで、自分たちと同じ経験をしなくてすむことだけが、彼らの励みであり、願いなのです。このような勇気と人類への関心を目の当たりにして感動しました。私たちが学んだこと：グローバルに考え、ローカルで行動する！災害が予防できなければ、悲惨な被害を受けることになる。それにしても不思議だったのは、津波でほかの木々が根こそぎなぎ倒された中で、奇跡の一本松だけがどうして倒れずに残ったのかということでした。災害に直面した時、私たちは人生の決定をしたり、自分の立場を明確にしたりするかもしれません……あるいは、今がその時かもしれません！気付くと帰国ため船で東京に戻る時が来ていました。デッキで涙ながらに地元の方々に見送られ、再びにっぽん丸に戻った私たちは、より力強く明確な意思を持ち、世界を変えるための資質を備えたリーダーとしてサマリー・フォーラムに参加しました。

### 提案とまとめ

グローバルユースリーダー育成事業は、まさに人生を完璧に変えてくれる経験でした。この事業が多くの青年の人生を変えていくプロセスの中で、他者にも変化をもたらすことは間違ひありません。異文化理解を深めることで、背景、人種、民族、宗教の異なる人々が他文化を受容、順応し、同時に多様性を尊重するようになるでしょう。相互理解により、世界はより良い安全な場所になります。しかし、そのためには SWYAA の活性化を図り、各国の成功事例を学ぶための会議を組織する必要があります。私をこの事業に参加させてくださった日本国政府と、青少年省を通じてケニア参加青年団のリーダーとしての責任を私に任せてくださったケニア政府に心から感謝いたします。

### ニュージーランド

ニティカ・エニオン

始めに、日本国内だけでなくグローバル規模の青少年育成に情熱を持ち、貢献されている日本国政府に対し、多大な感謝の言葉を述べさせていただきます。ニュージーランド参加青年団は本年度事業に参加させていただけたことを誇りに思います。ニュージーランド・チームにとってすばらしい学びと成長、文化理解の機会となりました。

### 地方プログラムとホームステイ

ニュージーランド参加青年団は、オマーン国参加青年団と共に香川県に向かいました。香川県の人々の温かいおもてなしに、最初から驚かされました。私たちは地元の方々によるすばらしいパフォーマンスで歓迎していただきました。ホームステイに少し不安を抱いていた団員もいましたが、彼らは短期間でホストファミリーとすばらしい友情を築き、満面の笑顔で戻ってきました。多くの団員は日本家庭での経験を心から楽しみ、別れは辛いものでした。

### オリンピックセンターでの陸上研修

オリンピックセンター初日の晩のアイスブレイキング時から、本事業が楽しみに満ちたものになると確信しました。各参加国団はすぐに打ち解け、出会いの喜びを分かち合いました。

導入フォーラムでは、各参加国団のメンバーの生活や、自国で取り組んでいる社会貢献について簡単な紹介を行いました。各国メンバーが世界中で積極的に社会貢献していることを知り、励まされました。

榎本英剛先生の啓発的な講義では、リーダーシップについて学び、伝統的なリーダーシップと現在のリーダーシップを比較しました。先生は各国参加青年に知識を授け、本年度事業に計り知れない貢献をしてくださいました。

## 寄港地

沖縄県のような特別な場所を訪問することができたことは、私たちにとって非常に特別でした。沖縄の気候と人々は、私の母国であるクック諸島を思い起こさせました。沖縄の人々は私たちをリラックスさせ、沖縄と日本本土の生活の違いについて私たちからのたくさんの質問に喜んで答えてくださいました。

訪問先の岩手県では 2011 年の東日本大震災での経験について、地元の様々な団体の方からお話を聞くことができ光栄でした。ここで築いた関係を今後も発展させ、これらの地域の復興支援に関わっていくことが必要です。この驚くべき回復力を持った人々から、本事業の参加青年が学べることがあります。

## コース・ディスカッション

コース・ディスカッションでは、異文化理解、教育、情報・メディア、社会起業家精神、ボランティア精神の各コースに分かれました。船上で最後に行われたサマリー・フォーラムでは、私たちが事業から非常に多くの学びを得たことが分かりました。教育コースでは、各国の様々な教育制度についてのディスカッションを通じて、教育に関する視野を広げることができました。異文化理解コースでは、目に見える氷山の上から 10% の文化とその下に隠れている 90% の文化を比較しました。ボランティア精神コースでは、変化を肯定的に楽しみ受け入れながら、人々の人生に変化を起こすための情熱と願いを共有しました。社会起業家精神コースでは、利潤を生み、事業者と顧客に有益をもたらすためだけではなく、社会に利益を還元できるビジネスについて学びました。情報・メディアコースでは、メディアから消化した情報をどのように見極めるべきかについて学びました。私たちはメディアの視点のソースとその出資者について考える必要があります。

## PY セミナー

PY セミナーには幅広い選択肢がありました。私は参加したセミナーから多くを得ました。英国参加青年団は、アイルランドと英国の歴史とその未来に関するすばらしいセミナーを行いました。ニュージーランド出身で、スコットランドの伝統を引き継いでいる私にとって、英国人の経験を直接的に理解するのに役立ちました。オマーン国によるアラビア語のレッスンにも参加し、アラビア語の基礎を分かりやすく教えてもらいました。最後に日本のガール・スカウトのセミナーに参加し、ガール・スカウトのベテランメンバーと力強く活気にあふれる時間を過ごしました。

## ナショナル・プレゼンテーション

ナショナル・プレゼンテーションは、例年、参加青年が心待ちにするプログラムです。今年は幅広い

才能を楽しむことができました。ダンス、歌、ビデオ、ドラマなど様々な形式が取り入れられました。日本による東日本大震災のプレゼンテーションは、全員の心を打ちました。ステージ上は、ペルー、日本、トルコ、ブラジルなどの華やかで美しい踊りで活気にあふれ、自文化を披露する楽しい時間となり、全員にとってのハイライトとなりました。

## 提案

- オリンピックセンターはセミナーなどには適した施設ですが、公共施設なので、各国のメンバーが夜に集まり親睦を深めることが難しかったです。ここでの滞在期間を短くすべきでしょう。
- 二つの寄港地活動は、外国参加青年が日本文化への理解を深めるのに非常に効果的でした。一日ずつ滞在を伸ばし、地元の人々とのつながりを深めることができると良いでしょう。
- 各国参加青年が親交を深め、個人的に情熱を持っている関心についてディスカッションするために、夜の自由時間を増やすと良いでしょう。
- 船上で二週間過ごしてようやく互いを深く知り、打ち解け始めることができました。1~2週間、船上での時間を増やせば効果的でしょう。

本事業と SWY 精神の継続に貢献されている日本国政府に対し感謝いたします。運営面から見ても、すばらしい事業です。

ニュージーランド参加青年団は IYEO と密接なつながりを築くことができたことに感謝します。このつながりを通じて文化理解を育み、花咲かせ、成長させていきます。今後も末永くこの強力な絆が続いているように。ありがとうございました。

## オマーン国

アディル・アハメド・アルシャンファリ

### 始めに

「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」は、11か国 204名の参加青年にリーダーシップ精神を吹き込むことにより、リーダーを生み出すことに成功しました。様々なコース、セミナー、自主イベントへの参加、企画を通じて、各参加青年の可能性を探る機会を提供してくれます。本年度は、オマーン国にとって 1990 年の第 2 回「世界青年の船」事業への初参加から数えて 9 回目の事業参加となりました。

私は第 22 回「世界青年の船」事業の既参加青年であり、今回は NL として参加しましたが、オマーン参加青年の選考プロセスはユニークだと感じています。才能とスポーツ省主催事業の参加経験に基づき選考されます。約 2 千人の青年がスポーツ省のプログラムに参加していますが、そこから 100 名に絞り、試験と面接を実施します。三つのインタビュー委員会が設けされました。

今年はオマーンで初めて 2 名の女性の参加がありました。さらに、SWYAA オマーンと他の既参加青年と一緒に 5 回の準備キャンプに参加しました。このキャンプはすべて新聞記事やフェイスブック、ツイッター、インスタグラム等のソーシャル・メディアを通じて報道されました。

### 地方プログラムとホームステイ

香川県でのホームステイは本事業でもすばらしい経験でした。共に参加したニュージーランド参加青

年団と親睦を深める機会になりました。プログラムは良く企画されており、ホストファミリーの温かいおもてなしの心を感じることができました。しかし、香川の文化を学ぶには日程が短すぎました。日本文化には、豊かな習慣、伝統、思想があります。

### 陸上研修

コース・ディスカッションは非常に学びが多く、興味深い内容でした。テーマ、情報源、手法は創造的で理解しやすく、セッションを通じてコースのファシリテーターが私たちをサポートし、導いてくださいました。文化や背景が異なる人々と知識を交換することもできました。課題別視察では、コース・ディスカッションの学びへの理解を深め、実際に体験することができました。

加えて、リーダーシップ・セミナーとプロジェクトマネジメント・セミナーは多くの参加青年にとって非常に効果的かつ有益であり、彼らの行動に多くの影響を与えました。

### 船上研修

PYセミナーと自主活動は、参加青年自身が活動を運営し、情報を共有するための有益な手段でした。変化を起こし、事業で重要な役割を果たすための青年のモチベーションをすばらしい形で示すことを可能とするこのような船上活動でスケジュールが埋まることは非常に喜ばしいことです。しかし、アイデアがスムーズに伝わらないものもいくつかありました。さらに、複数の自主活動が同時に実施されたため、どれに参加するか決め難くもありました。複数の活動に興味を抱いても、一つに絞らざるを得ませんでした。

### 寄港地活動

寄港地活動はいつも参加青年が日本文化、ライフスタイル、社会活動、そして沖縄県や岩手県のような場所について学ぶためのすばらしい環境を提供してくれます。今年の寄港地活動は、参加青年が日本のこと学ぶと同時に、ローカルユースが参加青年、特に外国参加青年と出会う場となりました。また、沖縄県は独特の文化と天候であるため、参加青年がより学びを深めたいと感じました。東日本大震災と津波が2011年にあったことから、今回、訪問地として選ばれた大船渡市と陸前高田市は、参加青年が被災地の実情を知り、地元の人々と心を通わせ、話を聞くために非常に良かったです。

### 提案

概してこの事業は、ほかの参加青年やローカルユースと共有できる多くの学びを与えてくれました。

- 第一に参加青年はホームステイで積極的に交流し、ホストファミリーに温かくもてなしていただきました。しかし、日本文化について多くを学ぶには日程が短すぎました。観光とショッピングはホームステイでは重要な部分です。これを通じて日本文化をより観察することができます。ホームステイで家族の皆さんと過ごすことも、日本の伝統を観察する上で欠かせません。豊かな日本文化を体験するのに最低三日間は必要でしょう。
- コースが分かれていたため、グループ・ミーティングで多くの情報を共有しました。レター・グループのメンバー全員でコース・ディスカッションの学びを共有する必要がありましたが、シャイで学びを共有することが難しい参加青年もいました。レター・グループで毎日ミーティングを行うことにより、全員の絆が強まり、チーム精神も高まるでしょう。

- ナショナル・プレゼンテーションは、各国文化を紹介する魅力的な手段でした。スライドや写真、ビデオ、音楽等を用いて、各参加国団が自国の文化を紹介する様子が見られるすばらしい一日でした。しかし、30分ではその多様な文化を紹介しきれない国もありました。一日ですべての参加国団のナショナル・プレゼンテーションを行うのはかなりハードでした。リハーサルで疲れた参加青年が、他国の発表中に眠気に襲われることがありました。一日に一つの国が自国文化を紹介すると良いと思います。
- 第22回「世界青年の船」事業の既参加青年としての経験から言うと、クラブ活動は参加青年自身で活動を運営し、活動を通じてほかの参加青年に新しい学びを与える機会になると考えています。
- 以前の事業のように、モーニング・アッセンブリーでのレター・グループ活動を増やすべきです。チームで協同し、新しい活動のアイディアを生みだすための良い環境を与えてくれます。
- 沖縄のフリータイムは、現地を知るために十分ではなく、時間を守るために大急ぎでした。

## まとめ

第22回「世界青年の船」事業の既参加青年、そして本事業のNLとして、私はこの二つのすばらしい経験から多くを得ましたが、特に本事業から多くのことを学びました。事業を実施してくださった、思慮深くすばらしい組織にスポットライトを当てたいと思います。本事業で他国と情報を共有する機会を私たちに与え、世界の青年を支援し、異文化理解に貢献してくださった日本国政府の取組に感謝いたします。このすばらしい事業を成功裏に導いてくださった内閣府、管理部、セミナー及びコース・ディスカッションのファシリテーターの皆様に特別な感謝を捧げます。御尽力ありがとうございました。

## ペルー共和国

ミリヤム・フスト

私たちをこのすばらしい事業に招へいしてくださった日本国政府内閣府に対し、SWYAAペルーとペルー参加青年団を代表し、感謝の言葉を述べます。時間と経験を私たちと共有し、この事業を成功裏に導いてくださった管理部員、IYEO、ボランティア、特別ゲストの皆様にも感謝いたします。

本事業の参加青年になることは、一生に一度の機会です。私はNLとして、ペルー参加青年団がチームとしてまとまり、生涯で最もすばらしい思い出の一つとなるような経験をする姿を目の当たりにしました。

セミナー、講義、寄港地活動、課題別視察、グループ・ワーク、自主活動を通じてリーダーシップ・スキルを実践することで、世界に目を向け、日本への関心と理解を深めました。さらに、ここで得た学びとインスピレーションを社会に還元する活動の機会とすべく、ネットワークを形成しました。

## NL会議

2014年10月の三日間、東京でNLが集い、事業への理解を深め、ディスカッションに取り組み、プログラムの立案をしました。短い日程でしたが、互いを知り、信頼関係を築くきっかけとなりました。その後、オンラインを通じてアイスブレイキング活動の企画を練り、出発準備中に助け合い、事業に向けてNLの結束を高めました。

## ペルー参加青年団の出発前準備（リマ、2014年10月—12月2015年）

SWYAA ペルーとして社会貢献活動を行う一方で、ナショナル・プレゼンテーション、PY セミナー、自主活動の企画をすることが、事業の準備プロセスにおいて重要でした。2015 年 1 月 13 日、リマの日本国大使館員、スポンサー、友人、家族の前でナショナル・プレゼンテーションを披露し、事業で披露する予定の文化を紹介しました。発表準備を通じて、私たちはチームとしてまとまりました。このように充実した準備期間を過ごしたこと、ペルー参加青年団が本年度事業の価値を高めることに貢献したのは明らかです。

### 地方プログラムとホームステイ

奈良県 IYEO 実行委員会によるプログラムの運営準備はすばらしかったです。工芸のセッションで若い先生と一緒にうちわ作りをしたことは、私たちにとって特別な経験でした。全員にとって初めての奈良県でしたが、新幹線で富士山のすばらしい光景を見ることができ、更にすばらしい旅になりました。

地元のファミリー宅でのホームステイは、まぎれもなく事業全体におけるハイライトの一つでした。奈良県庁を表敬し、ホテルで歓迎レセプションに参加しました。最後に地元ホストファミリーと有意義な時間を過ごし、皆、各家庭で温かくもてなされていると感じました。短い日程でしたが、互いの国への好奇心を共有したことは忘れられない思い出になりました。また、ホストファミリーと高さ 15 メートルの大仏を訪れ、見たこともないような花火のすばらしさに驚き、一緒に食事をして談笑しました。ホームステイは、価値観とライフスタイルの共通点について話し合う機会を私たちに与えてくれました。私はホストファミリーの息子さんが購入した築百年の家屋を訪問する機会を頂きました。その家は、息子さんと家族が伝統的な日本の家具や芸術品で飾り付けており、家としての価値が高められていました。私にとって夢のような経験でした。

### 陸上研修

陸上研修は管理部によるオリエンテーションで始まりました。NL によるアイスブレイキングは、外国参加青年と日本参加青年の顔合わせの場となりました。興奮とエネルギーがあふれる中、日本参加青年と私たちのレター・グループがすばらしい出会いを果たし、良いスタートとなりました。

その後、私たちは様々な活動に参加しました。NL は皇太子殿下御接見と安倍晋三内閣総理大臣表敬という記憶に残る二つのイベントを体験する機会を頂きました。

### コース・ディスカッション

参加青年は関心と経験により事前に五つのグループに分けられていました。乗船前に出航前の活動を行いました。コースごとに、異文化理解、教育、情報・メディア、社会起業家精神、ボランティア精神のテーマについて充実した話合いをしました。コースではディスカッション、講義、課題別視察に続き、各国の状況に関するリサーチと考察に取り組みました。サマリー・フォーラムで、コース活動の成果を発表しました。

### レター・グループ

陸前高田市の津波記念碑や大船渡市の越喜来小学校を訪問し、青年グループと才能ある人々が強烈な瞬間を分かち合ったことで、強い絆が生まれたことは確かです。レター・グループ活動は、コミュニケーション能力、尊敬、理解、友情を実践するすばらしい手段です。船上スケジュールでは三回のミーティング

ィングだけでしたが、レター・グループで振り返りと楽しみを共有する貴重な時間でした。

## 船上研修

私たちの第二の故郷であるにっぽん丸は、本事業の大きな部分を経験するすばらしい場でした。船の施設はトップクラスです。乗務員は非常に親切で、私たちの旅を成功裏に導いてくださった影の立役者でした。

## ナショナル・プレゼンテーション

外国参加青年や日本参加青年と会話を交わす中で、ナショナル・プレゼンテーションが各国とその社会問題、現状について学ぶ最善の方法の一つだったことが分かりました。

## 寄港地活動

寄港地活動が本事業の要の一つであることは間違ひありません。沖縄県那覇市と岩手県大船渡市・陸前高田市を訪問し、日本の様々な文化の全体像をつかむことができました。

陸前高田市の訪問では、2011年の大震災と津波の影響への理解を深めることができました。被災地を訪れ、復興の証人となったことは、ローカルニュースとの対話や課題別視察と同様に、私たちの目を開かせてくれ、また謙虚な気持ちにさせてくれました。この訪問を通じて、自国の現実を振り返ることができました。

## まとめと提案

参加青年としての経験を経てから今回NLを務めたことで、私は本事業について別の視点を得ることができました。事業の効果的な運営実施に対する管理部の並みならぬ苦労が理解、評価できるようになりました。

一つの提案として、オリンピックセンター又はにっぽん丸船上で、少なくとも一回は管理部と参加青年が一緒にランチをとる機会を設けることで、このような込み入ったスケジュールをこなす上で参加青年が考慮すべき点について管理部から更に学ぶことができるでしょう。多くの参加青年にとって夜9時まで公式なセッションや活動に参加することは、少々ハードで疲れることでした。管理部との気軽な交流を増やすことで、参加青年は彼らを理解し、親しみを増すことでしょう。今後、船上研修の日程を増やし、個人での振り返りと休憩の時間を増やすと良いでしょう。

個人的にはホームステイ、寄港地活動、レター・グループの時間が事業で最も重要な部分だと思います。ホームステイは、少なくとも一日増やすことで、ホストファミリーをより良く知り、共に時間を過ごし、学びの経験を共有できるでしょう。また、レター・グループのミーティングの機会を増やすのも良いでしょう。

この事業を実現してくださったすべての方々に、もう一度感謝の言葉を申し上げたいと思います。今後にいかすことができる前向きな経験になりました。参加青年全員が積極的に社会に貢献し、この三週間で学んだすべてを世界に伝えていくことを願います。

## スリランカ民主社会主義共和国

タラカ・ラグナス・ジャヤセカラ

始めに、青年に投資し、異文化理解と対話のためのこのようなすばらしい舞台を用意してくださった日本国政府に対し感謝いたします。本事業は世界で最も名高い青年育成事業の一つであり、多くの国と文化の懸け橋となっています。200人を超える参加青年が、コース・ディスカッションだけではなく、チームワークと連携など多くの側面を持ち合わせた活動に取り組む機会を得ています。事業の内容は、日本と日本人への理解を深めることができるようにすばらしく企画されています。

### ホームステイ

ホームステイは事業全体におけるハイライトの一つでした。私たちは日本人家族と一緒に生活し、日本の文化とライフスタイルを実際に体験する機会を頂きました。二日間のプログラムの運営は非常にすばらしく、私たちの団はホストファミリーの温かいもてなしを受けました。また、訪問先の各県で観光の機会を頂き、歴史的、文化的に重要な場所を見学しました。ホストファミリーは親切にも私たちに日本食を紹介してくださり、全員にとってすばらしい経験になりました。

今後の事業への提案ですが、事前にホストファミリーを御紹介いただければ、あらかじめ連絡を取り合えるようになります。これにより、ホストファミリーと理解が深まり、参加青年団が来日後、一緒に観光プランを練ることができるでしょう。

### 陸上研修

陸上研修の中心はコース・ディスカッションでした。オリンピックセンターは私たちに活動とアイスブレイキングを自由に行える場を提供してくれました。経験豊富なファシリテーターから多くの学びを得ました。私たちは講義を聞いてモチベーションを高めました。また、講師陣は非常に若くフレンドリーでした。都内視察と課題別視察に参加しましたが、東京周辺を観光する機会はそれほどありませんでした。このような機会は、外国参加青年にとって都会生活や東京の文化に触れることのできる大変貴重な機会となるでしょう。

### 船上研修

船上研修はスリランカ参加青年団にとって新しい経験で、様々な船上活動に参加しました。研修のハイライトであるナショナル・プレゼンテーションを通じ、参加青年は様々な国の文化や踊りへの理解を深めました。各国がナショナル・プレゼンテーションにかけた準備と関心の高さをうかがうことができたのは、すばらしかったです。船上研修には、私たちの才能を披露した「SWY Got Talent」など多数の活動が含まれていました。本事業の優れた点は、寄港地活動委員会、リーダーシップ・セミナー委員会、PYセミナー委員会など様々な委員会があることです。これらは青年がリーダーシップを発揮し、リーダーシップ・スキルとチームワークを高めるためのすばらしい機会です。国籍が様々である私たちが一つのチームとして団結し、協力し合えることを知り、感動しました。

### 寄港地活動：沖縄県

寄港地の沖縄では、沖縄の歴史的な場所を見ることができ、すばらしい経験となりました。しかし、沖縄とその人々について十分理解するには、二日間では物足りなく感じました。

### 寄港地活動：岩手県

この地への訪問が事業全体で最も感動的な経験でした。津波の被災者とお話ししたことで、スリランカで4万人を超える死者を出した2004年のスマトラ沖地震と津波の記憶がよみがえりました。自分たちの経験と結び付け、悲しみを分かち合うことができたことはすばらしいことでした。ほかのプログラムと同様に、今後の事業でもこの訪問が継続されるよう強く提案します。

## まとめ

最後になりましたが、本事業を成功に導き、大変意義深く興味深いプログラムにしてくださった日本国政府内閣府に感謝いたします。

## トルコ共和国

ハリル・ジェム・オズトゥルク

### 始めに ー参加青年選考プロセス

「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」は、文化交流、環境、社会貢献、スポーツ活動等の重要な側面を持っています。NLとしてこの事業に参加することができ、大変誇りに思っています。参加青年にとっては、スキルと語学力向上の機会になりました。参加青年選考のため、まずは青年スポーツ省のホームページとソーシャル・ネットワーク・サービスを通じて参加青年の募集を行いました。2千名を超える応募者の中から基準に従って選考を行いました。その後、選ばれた100名にスカイプで面接又は直に個人面接を実施し、才能とコミュニケーションスキル等を考慮の上、最終的に8名の参加青年が決定しました。事業参加に向けて3回のオリエンテーションを実施しました。概して、本事業は向上心を高めてくれるプログラムであり、内閣府、管理部の皆様の御支援を頂き、異文化理解の特別な経験をすることができました。

### 陸上研修

東京に到着すると、全参加国のメンバーが事業への期待に胸を躍らせていることがよく分かりました。ANA インターコンチネンタルホテル東京に滞在し、フリータイムに東京を見る機会がありましたが、参加国間のアイスブレイキングで、参加青年たちは打ち解け合うことができました。さらに、歓迎レーションは顔合せとムード作りの良い機会でした。

### ホームステイ

トルコ参加青年団は1月23日から25日に新潟県でホームステイに参加し、メンバー全員が大変印象的な時間を過ごしました。ホームステイにはインド参加青年も一緒でした。私たちはホストファミリー宅で二泊しましたが、全員の感想は「感謝と愛」に尽きるようでした。ホストファミリーから日本の文化と日常生活について多くのことを教えていただき、歴史的な場所や公園、中央市場などにも連れて行っていただきました。

### オリンピックセンター

オリンピックセンターは外国参加青年と日本参加青年が互いを知るためのすばらしい場で、事業で最も大変な部分もありました。施設はセルフ・サービスなので、参加青年が清掃を担当しました。課題に直面することもありましたが、経験として受け入れることができました。一方、私たちのようなイス

ラム教の参加国にとって、大きな課題がありました。イスラム教徒はハラル・フード以外食べないので、もう少し食事の選択肢を増やしていただきたいです。また、無線のインターネットサービスは必要です。チームメンバー同士の連絡、ミーティング時間の調整、家族と参加青年のコミュニケーションの問題が解決できませんでした。このためにもインターネットは必要でした。オリンピックセンターはセルフ・サービス施設で個人の所用を済ませることがほとんどできませんでした。センターの外で買い物をする機会が必要だと思います。一方、宗教上の理由で公共の風呂が使えない私たちのために、管理部がシャワーを使える部屋を用意してくださいました。もう一つの課題は都内視察です。異文化の価値への理解を深めるため、この種の事業は非常に重要です。歴史的な場所、博物館、図書館などを訪問し、文化的価値を理解するための活動には時間がかかります。日本参加青年が企画してくれた今年の都内視察は残念ながら時間が短すぎました。最後になりましたが、協力してくださった皆様に感謝いたします。

### 船上研修—寄港地活動

外国参加青年にとって、最も興味深いプログラムでした。私たちはついににっぽん丸に乗船し、2月2日にすばらしい航海が始まりました。出航式は全員にとって忘れられない思い出です。船上で家族と出会い、交流したことでも重要でした。沖縄と岩手の二県で寄港地活動を行いました。沖縄県の活動は、二日間という限られた日程であり、歴史的な場所への訪問はわずか一時間でした。また、最も重要な場所を訪問し、ローカルニュースと出会う機会も頂きました。青年は皆とても親切で、訪問都市での経験と情報を船上で共有することができました。岩手県では自国のミニ・プレゼンテーションを行い、異文化理解とアイディア交換をするきっかけとしました。

岩手県について特筆したいことがあります。震災の背景について学び、地元の方々と感情と経験を共有した時間は、私たち全員にとって非常に印象的でした。私たちは様々なことを理解しました。日本人の態度は賞賛に値すると思います。彼らは復興プロセスをきちんと計画し、すばらしい忍耐力を備えています。トルコ参加青年は皆、彼らと出会えたことに感謝しています。

### コース・ディスカッション

異文化理解、教育、情報・メディア、社会起業家精神、ボランティア精神—すべてのコース・ディスカッション・グループに関し、私は自国チームから多くの肯定的なフィードバックを受けました。また、これらのコースは事業で最も重要な部分の一つでもあります。メインコンセプトが青年に共通する課題であるように思われ、私たちの今後の活動にいかすことができるからです。

### レター・グループ

外国参加青年と日本参加青年のコミュニケーションを円滑にするため、全員が11のレター・グループに分かれました。レター・グループ活動は、互いに打ち解け合うのに適していました。文化的特徴を更に共有するためにも、今後の事業ではレター・グループの時間を増やすと良いでしょう。

### PYセミナー、自主活動、エキシビション・ナイト

これらのセミナーのアイディアはいたって明白ですが、スケジュールは更に調整が必要だと思います。セミナーの数が多く、ほとんどが告知する時間がありません。多くの参加青年は自分が関心を持つ分野について何かしたいと考えており、セミナーは大好評でした。トルコ参加青年団はマーブリングの自主

活動を企画しましたが、非常に魅力的な企画で、多くの参加青年の興味をひきました。この企画はインターナショナル・ナイト EXPO でも受け入れられました。私たちのブースはイベント・ブースの中で最も魅力的なものの一つでした。書道、伝統的な食べ物、ヘンナ、マンガラ、マーブリング、伝統的な衣装など多くの特徴的な文化を展示しました。

## まとめ

最後になりましたが、私たちは本事業に参加したことを大変誇りに思い、このすばらしい航海に感謝いたします。参加国はそれぞれの価値観と文化を互いに示すことができました。また、この事業の向上のために、参加青年一人一人が重要な役割を果たしました。この夢を実現するために多大な尽力を頂きましたすべての政府と代表者に感謝の言葉を申し上げます。最後に、この事業の実現に貢献し、人生を変える航海を可能にし、忘れ難いものにしてくださった日本国政府、船の乗務員、内閣府職員、すべての方々に心から感謝の言葉を述べたいと思います。

## 英國

コーナー・ヒューストン

### 始めに

英国参加青年団のリーダーとして内閣府主催の「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」に参加させていただいたことは、私にとって大変な名誉でした。

私自身にとっても、国中から集まった9名の英国参加青年全員にとって、人生を変えてくれる経験でした。

ビジョンを持ち、この特別な事業を御支援くださった日本国政府と、大成功を収めたこの事業のすばらしい運営に関わられた内閣府管理部の皆様の献身と情熱に感謝いたします。

### ホームステイ

東京到着後、英国参加青年団とケニア参加青年団は宮崎県のホームステイ・プログラムに参加しました。到着時から、歓迎パーティーとすばらしい夜のレセプションで温かく歓迎していただき、リラックスすることができました。訪問先の生目小学校では、子供たちのパフォーマンスに元気をもらいました一楽しい訪問でした！県知事表敬は私たちにとって栄誉でしたが、特に英国参加青年団代表としてごあいさつの機会を頂き、英国と日本の深いつながりを祝えたことは、私にとって大きな喜びでした。私たちのホストファミリーは、日本人の温かいおもてなしを体現してくださいました。英国参加青年団のメンバー全員がこの経験を宝に思っていることでしょう。日本文化に浸りきることのできるすばらしい手段であり、御親切にしていただいたホストファミリーに感謝しています。

### オリンピックセンターでの陸上研修

宮崎県から戻ると、オリンピックセンターでアイスブレイキング、オリエンテーション、コース・ディスカッションへの導入、レター・グループ、講義などの陸上研修に参加しました。中でも榎本英剛氏によるリーダーシップ・セミナーは、事業のハイライトの一つと言えるでしょう。

この期間に実現した皇太子殿下御接見と安倍晋三内閣府総理大臣表敬は、私たちにとって光栄の極みでした。

スポーツには楽しい雰囲気で人々を一つにまとめる力があることが、スポーツ・デーによって分かりました。また、都内視察の機会を頂いたこと、そして運営に関わってくださった日本参加青年の力添えに感謝いたします。

### にっぽん丸船上でのシップ・フォー・ワールド・ユース (SWY)

にっぽん丸が東京を出港した時の感動は、言葉に尽くせないものがありました一国境を超えた SWY ファミリーとして、私たちは特別な時間を共有しました。

船上では文化的なディスカッションやディベートに取り組み、友情を育みました。船上の雰囲気は、尊敬と温かい友情に包まれていました。また、スポーツや「SWY Got Talent」などの交流の時間もありました！

船が私たちの家になり、すべての部屋と廊下が日本参加青年と外国参加青年にとってすばらしい交流の場となり、話や経験、音楽、ダンスを共有しました。レター・グループが私たちの家族になり、船は互いに尊敬し合い、友情を育む世界になりました。

### PYセミナーと自主活動

本事業の活動で楽しかったのは、PY セミナーでした。テーマの幅広さは印象的でしたが、私自身も「北アイルランド：紛争から紛争後へ—新しい未来を想像する青年の役割」というテーマでセミナーを実施しました。これらのセミナーは、ピア・ラーニング（互いに学び合う）一リーダーとしての学び、教育を促進する優れた手法です。

### コース・ディスカッション

英国参加青年団の全員は、様々なコース・ディスカッション・グループへの参加を大いに楽しみましたが、これはボランティアなど特定分野のスキルと経験を伸ばす機会でもありました。国際連合大学とディスカッション・グループ別に関連施設も訪問しました。各グループのファシリテーターは極めて知識が豊富で、すべての参加青年にとってすばらしい学びの経験となりました。

### ナショナル・プレゼンテーション

ナショナル・プレゼンテーションは、本事業の異文化的側面におけるハイライトの一つでした。参加青年が才能を披露するすばらしい一日になり、各参加国が織り上げた豊かなタペストリーでした。パフォーマンスが文化的なアイスブレイキングの役割を果たし、各国の複雑さと豊かさを知ることができました。

英国参加青年団は、自国の豊かな伝統遺産と多様性を祝う「A blossoming blend」というテーマで発表を行い、英国の活気ある新しい現実と歴史を織り交ぜつつ、英国各地の様子を紹介しました。

### 沖縄県の寄港地活動

最初の寄港地は沖縄県那覇市でした。この地が中国と台湾の影響を色濃く受けており、日本の中でも特異な文化を持っていることは、到着時から明らかでした。私たちは課題別視察を行い、魅力的な首里城を訪問し、街でショッピングする機会も得ました。

英国参加青年団から沖縄県副知事にギフトを贈呈し、ローカルユースや船への招待客と共に過ごす機

会を頂けたことを光栄に思います。インターナショナル・ナイト EXPO では、外国参加青年と日本参加青年、ローカルユースが世界の文化の多様性を祝い、体験することができました。

### 岩手県の寄港地活動

陸前高田市と大船渡市への訪問は、全事業中で最も感動的な場面の一つでした。ローカルユースと実行委員による温かい歓迎を受け、互いに感謝し合いました。

私たちは 2011 年の大震災と津波で壊滅した地域を訪問する機会を得ました。ローカルユースと出会い、地域を襲った悲劇的な体験を分かち合いました。勇気を持って地域と生活の復興に取り組まれている中小企業の経営者と住民と話しました。これは、すべての関係者の心を揺さぶる体験でした。私たちはこの経験を永遠に心に留めておかなければなりません。参加青年は皆、岩手県の人々とのつながりを感じています。私たちは陸前高田市であり、大船渡市なのです。

人間の精神力には、止めることのできないパワーがある—希望の泉は枯れないということをこの訪問は示してくれました。

### 提案

この事業に参加する機会を頂いたことに対し、もう一度心から感謝いたします。私たちは皆、人生を変えてくれる経験を大いに楽しみました。本事業は私たちの期待以上でしたが、更なる向上のために、以下の提案をさせていただきます。

- 自由時間を増やす必要があります。参加青年が休息し、さらに、自主活動を行うための自由日などを設定すると良いでしょう。
- 英国参加青年団の全員が、PY セミナーを増やすことを望んでいます。
- 陸上と船上で終日利用できる、水、紅茶、コーヒーの設備を設ける。
- リーダーシップ・セミナーの数を増やす。(特に榎本氏のセミナー)

### まとめ

「結い」は、団結、協力、調和しつつ連携することを意味する日本語です。この言葉は私たちが親しんだ日本文化を特徴付けるとともに、本事業の特徴でもあります。

この美しい国に滞在中、私たちを歓迎してくださった日本参加青年、ローカルユース、皆様のおかげで、私たちは皆、このすばらしい特別な経験をすることができました。日本の皆様に深い親しみを感じています。

この事業は、私自身と英国参加青年団全員にとって人生を変える経験になりました。グローバル市民の世界でリーダーになるための意欲を駆り立ててくれました。この経験を心に留め、積極的に貢献していきたいと思います。私たちはグローバルな SWY ファミリーの一員になりました。世界の未来への信念と貢献に対し、日本国政府、内閣府、日本の方々に多大な感謝の気持ちを述べたいと思います。

## 船長からのメッセージ

にっぽん丸 船長 久保 滋弘

平成 26 年度グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」

の全プログラムを無事に、また成功裏に終えられましたことを心よりお慶び申し上げます。

またこの度同プログラムの船上研修をお手伝いさせていただいたにっぽん丸を代表しまして、この航海を事故、トラブル等無く完了し、にっぽん丸としての勤めを果たすことができましたことは偏に矢作管理官、押切、宮原両副管理官を初めとする管理部の皆様方の本船運航についての多大な御協力と、内閣府並びに日本青年国際交流機構、寄港地那霸並びに大船渡、陸前高田における受入委員会ほか関係者の皆様方の御支援の賜物と衷心より厚く御礼申し上げます。

本船の運航を預かる身としましては、この度の航海を通じて洋上から見る自然の風景や海洋生物との出会いといった、船旅ならではの楽しみを味わっていただく機会がやや少なかったことが心残りではあります、この季節としてはまずまず穏やかな気象に恵まれ、若干のインフルエンザ患者は出たものの大な怪我人や病人が発生せず、参加青年の皆さんが無事船上研修を終えられたことによりも安堵いたしました。

私個人としましては、この度初めて船長という立場で本事業に関わらせていただき、参加青年の研修活動をより間近に拝見する機会を得ることができましたが、その中で、解決困難な問題が山積し複雑さを増す今日の国際情勢の中で集まった各国の青年たちが、一様に国家、民族、文化、習慣、宗教等における互いの多様性を尊重し、異文化を積極的に学び理解しようとする態度を示されていたこと、特に、とかく均質性が重んじられるがちな日本社会で育たれた日本参加青年たちが、同様の価値観を共有され、積極的に交流活動をされていたことに、失礼ながら若干の驚きを覚えつつも深く感動しました。

それぞれ個性的な参加青年の皆さんがあつし学ばれる姿を拝見し、船上研修とは多様性の尊重という価値観を共有できる若者たちがまさに「一つ屋根の下に暮らし、同じ釜の飯を食う」ことを通じて濃密に交流し、生涯続くような友情を育み得るすばらしいプログラムであると改めて感じました。このプログラムが今後も継続、拡大され、本事業を通じて培われた相互理解と友情を基礎とした交流と絆が世界中に更に広がることを願っております。

またそんな青年たちの自主性を尊重しながら絶妙な距離感を持って青年たちの学びと気付きを見守り、献身的にサポートされていた管理部、研修アドバイザー、講師並びにNLの皆様の姿には強い感銘を受けました。めまぐるしく変化し、緊張を増している国際情勢の中で参加青年全員の安全を確保しつつ本事業を完遂された関係者の皆様方の御心労は察するに余ります。皆様本当に御苦労様でした。

今回は那霸港と大船渡港に寄港しましたが、それぞれの寄港地において参加青年が沖縄の歴史や東北の震災とその後の復旧道半ばにある現状を真摯に学び、思いを共有しようとする姿を目の当たりにし、私自身自国の歴史をより深く学び、また今も災害の復旧の遅れに苦しむ人々を思い、関わり続けることの大切さについて思いを新たにするとともに、災害や紛争で現に苦しんでいる人々が世界各地に多く存在することを改めて考える機会を与えていただいたと感謝しております。

このすばらしく意義深い事業に、我々にっぽん丸の乗組員が少しでもお役に立てたのであれば幸に存じます。また、今後ともお手伝いさせていただく機会がありますことを心より願っております。

最後に、この事業に関わられた関係者の皆様の御健勝と、参加各国の御発展、そして参加青年の皆様の御活躍を心より祈念いたします。

# アンケート結果

## 1. 調査方法

全参加青年に対してプログラム全体についてのアンケートと日本参加青年に対して訪問国活動についてのアンケートを行った。

- ① プログラム全体については、評価会（2月12日）でアンケート用紙を配布し、回収した。
- ② 海外研修活動については、帰国後研修（2月23日）でアンケート用紙を配布し、回収した。

## 2. 回収率

- ① 100%（全参加青年204名中の204名の回答）
- ② 99.1%（日本参加青年108名中の107名の回答）

## 3. 評価方法

5段階評価（1, 3, 24は複数選択のため実数表示、12, 19は選択回答）

各活動に対するコメントは第5～7章の各項目に掲載。